



ハンス・クリスチャン・アンデルセン

# 雪の女王

Bilinguator

ハンス・クリスチャン・アンデルセン

# 雪の女王

Hans Christian Andersen

## The Snow Queen

## 雪の女王

with illustrations of Vilhelm Pedersen

第一のお話。鏡とそのかけ  
らのことStory the First, Which  
Describes a Looking-Glass and  
the Broken Fragments

さあ、きいていらっしゃい。  
はじめますよ。このお話をお  
しまいまできくと、だんだん  
なにかがはっきりしてきて、  
つまり、それがわるい魔法使  
まほうつかいのお話であった  
ことがわかるのです。この魔  
法使というのは、なかまでも  
いちばんいけないやつで、そ  
れこそまがいなしの「悪魔あ  
くま」でした。

You must attend to the commencement of this story, for when we get to the end we shall know more than we do now about a very wicked hobgoblin; he was one of the very worst, for he was a real demon.

## The Snow Queen

さて、ある日のこと、この悪魔は、たいそうなごきげんでした。というわけは、それは、鏡をいちめん作りあげたからでしたが、その鏡というのが、どんなけっこうなうつくしいものでも、それにうつると、ほとんどないもどうぜんに、ちぢこまってしまうかわり、くだらない、みっともないようすのものにかぎって、よけいはっきりと、いかにもにくにくしくうつるといふ、ふしぎなせいしつをもったものでした。

どんなうつくしいけしきも、この鏡にうつすと、煮にくたらしたほうれんそうのように見え、どんなにりっぱなひとたちも、いやなかっこうになるか、どうたいのない、あたまだけで、さかだちするかしました。顔は見ちがえるほどゆがんでしまい、たった、ひとつぼっちのそばかすでも、鼻や口いっばいに大きくひろがって、うつりました。

One day, when he was in a merry mood, he made a looking-glass which had the power of making everything good or beautiful that was reflected in it almost shrink to nothing, while everything that was worthless and bad looked increased in size and worse than ever.

The most lovely landscapes appeared like boiled spinach, and the people became hideous, and looked as if they stood on their heads and had no bodies. Their countenances were so distorted that no one could recognize them, and even one freckle on the face appeared to spread over the whole of the nose and mouth.

## 雪の女王

「こりやおもしろいな。」  
と、その悪魔はいいました。  
ここに、たれかが、やさしい、つつましい心をおこしますと、それが鏡には、しかめつつらにうつるので、この魔法使の悪魔は、じぶんながら、こいつはうまい発明はつめいだわいと、ついわらいださずには、いられませんでした。

この悪魔は、魔法学校をひらいていましたが、そこにかよっている魔生徒どもは、こんどふしぎなものがあらわれたと、ほうぼうふれまわりました。

さて、この鏡ができたので、はじめて世界や人間のほんとうのすがたがわかるのだと、このれんじゅうはふいちょうしてあるきました。

The demon said this was very amusing. When a good or pious thought passed through the mind of any one it was misrepresented in the glass; and then how the demon laughed at his cunning invention.

All who went to the demon's school—for he kept a school—talked everywhere of the wonders they had seen, and declared that people could now, for the first time, see what the world and mankind were really like.

## The Snow Queen



で、ほうぼうへその鏡をもちまわったものですから、とうとうおしまいには、どこの国でも、どの人でも、その鏡にめいめいの、ゆがんだすがたをみないものは、なくなってしまいました。

They carried the glass about everywhere, till at last there was not a land nor a people who had not been looked at through this distorted mirror.

## 雪の女王

こうなると、図にのった悪魔のでしどもは、天までも昇のぼって行って、天使てんしたちや神さままで、わらいぐさにしようとおもいました。ところで、高く高くのぼって行けば、行くほど、その鏡はよけいひどく、しかめつつらをするので、さすがの悪魔も、おかしくて、もっていられなくなりしました。でもかまわず、高く高くとのぼって行って、もう神さまや天使のお住居すまいに近くなりました。すると、鏡はあいかわらず、しかめつつらしながら、はげしくぶるぶるふるえだしたものですから、ついに悪魔どもの手から、地の上へおちて、

何千万、何億万、というのではたりない、たいへんな数に、こまかくくだけで、とんでしまいました。

They wanted even to fly with it up to heaven to see the angels, but the higher they flew the more slippery the glass became, and they could scarcely hold it, till at last it slipped from their hands, fell to the earth, and was broken into millions of pieces.

But now the looking-glass caused more unhappiness than ever, for some of the fragments were not so large as a grain of sand, and they flew about the world into every country.

## The Snow Queen

ところが、これがため、よけい下界げかいのわざわいになったというわけは、鏡のかけらは、せいぜい砂つぶくらの大きさしかないのが、世界じゅうにとびちってしまったからで、これが人の目にはいると、そのままそこにこびりついてしまいました。すると、その人たちは、なんでも物をまちがってみたり、ものごとのわるいほうだけを見るようになりまして。それは、そのかけらが、どんなちいさなものでも、鏡がもっていたふしぎな力を、そのまま、まだのこしてもっていたからです。

なかにはまた、人のしんぞうにはいったものがあって、そのしんぞうを、氷のかけらのように、つめたいものにしてしまいました。

そのうちいくまいか大きなかけらもあって、窓ガラスに使われるほどでしたが、そんな窓ガラスのうちから、お友だちをのぞいてみようとしても、まるでだめでした。

When one of these tiny atoms flew into a person's eye, it stuck there unknown to him, and from that moment he saw everything through a distorted medium, or could see only the worst side of what he looked at, for even the smallest fragment retained the same power which had belonged to the whole mirror.

Some few persons even got a fragment of the looking-glass in their hearts, and this was very terrible, for their hearts became cold like a lump of ice.

A few of the pieces were so large that they could be used as window-panes; it would have been a sad thing to look at our friends through them.



## 雪の女王

ほかのかけらで、めがねに用いられたものもありましたが、このめがねをかけて、物を正しく、まちがいのないように見ようとすると、とんださわぎがおこりました。悪魔はこんなことを、たいへんおもしろがって、おなかをゆすぶって、くすぐったがって、わらいました。

ところで、ほかにもまだ、こまかいかけらは、空のなかにただよっていました。さあ、これからがお話なのですよ。

## 第二のお話。男の子と女の子

たくさん家がたてこんで、おおぜい人がすんでいる大きな町では、たれでも、庭にするだけの、あき地をもつわけにはいきませんでした。ですから、たいてい、植木うえきばちの花をみて、まんぞくしなければなりません。

そういう町に、ふたりのまづしいこどもがすんでいて、植木ばちよりもいくらか大きな花ぞのをもっていました。

Other pieces were made into spectacles; this was dreadful for those who wore them, for they could see nothing either rightly or justly. At all this the wicked demon laughed till his sides shook—it tickled him so to see the mischief he had done.

There were still a number of these little fragments of glass floating about in the air, and now you shall hear what happened with one of them.

## Second Story: A Little Boy and a Little Girl

In a large town, full of houses and people, there is not room for everybody to have even a little garden, therefore they are obliged to be satisfied with a few flowers in flower-pots. In one of these large towns lived two poor children who had a garden something larger and better than a few flower-pots.

## The Snow Queen

そのふたりのこどもは、にいさんでも妹でもありませんでしたが、まるでほんとうのきょうだいのように、仲よくしていました。

They were not brother and sister, but they loved each other almost as much as if they had been.

そのこどもたちの両親は、おむこうどうしで、その住んでいる屋根うらべやは、二軒の家の屋根と屋根とがくっついた所に、むかいあっていました。そのしきりの所には、一本の雨どいがとおっていて、両方から、ひとつずつ、ちいさな窓が、のぞいていました。

Their parents lived opposite to each other in two garrets, where the roofs of neighboring houses projected out towards each other and the water-pipe ran between them.

で、といをひとまたぎしさえすれば、こちらの窓からむこうの窓へいけました。

In each house was a little window, so that any one could step across the gutter from one window to the other.

こどもの親たちは、それぞれ木の箱を窓の外にだして、台所でつかうお野菜をうえておきました。そのほかにちょっとしたばらをひと株うえておいたのが、みごとにそだって、いきおいよくのびていました。

The parents of these children had each a large wooden box in which they cultivated kitchen herbs for their own use, and a little rose-bush in each box, which grew splendidly.

## 雪の女王

ところで親たちのおもいつきで、その箱を、といをまたいで、横にならべておいたので、箱は窓と窓とのあいだで、むこうからこちらへと、つづいて、そっくり、生きのいい花のかべを、ふたつならべたように見えました。

Now after a while the parents decided to place these two boxes across the water-pipe, so that they reached from one window to the other and looked like two banks of flowers.

えんどう豆のつるは、箱から下のほうにたれさがり、ばらの木は、いきおいよく長い枝をのばして、それがまた、両方の窓にからみついて、おたがいにおじぎをしあっていました。まあ花と青葉でこしらえた、アーチのようなものでした。

Sweet-peas drooped over the boxes, and the rose-bushes shot forth long branches, which were trained round the windows and clustered together almost like a triumphal arch of leaves and flowers.

その箱は、高い所にありましたし、こどもたちは、その上にはいあがってはいけないのをしっていました。そこで、窓から屋根へ出て、ばらの花の下にある、ちいさなこしかけに、こしをかけるおゆるしをいただいて、そこでおもしろそうに、あそびました。

The boxes were very high, and the children knew they must not climb upon them, without permission, but they were often, however, allowed to step out together and sit upon their little stools under the rose-bushes, or play quietly.

## The Snow Queen



冬になると、そういうあそびもだめになりました。窓はどうかすると、まるっきりこおりついてしまいました。そんなとき、こどもたちは、だんろの上で銅貨どうかをあたためて、こおった窓ガラスに、この銅貨をおしつけました。すると、そこにまるい、まんまるい、きれいなのぞきあなができあがって、このあなのむこうに、両方の窓からひとつずつ、それはそれはうれしそうな、やさしい目がぴかぴか光ります、それがあの男の子と、女の子でした。

男の子はカイ、女の子はゲルダといました。

In winter all this pleasure came to an end, for the windows were sometimes quite frozen over. But then they would warm copper pennies on the stove, and hold the warm pennies against the frozen pane; there would be very soon a little round hole through which they could peep, and the soft bright eyes of the little boy and girl would beam through the hole at each window as they looked at each other.

Their names were Kay and Gerda.

## 雪の女王

夏のあいだは、ただひとまたぎで、いったりきたりしたものが、冬になると、ふたりのこどもは、いくつも、いくつも、はしごだんを、おりたりあがったりしなければ、なりませんでした。外そとには、雪がくるくる舞まっていた。

In summer they could be together with one jump from the window, but in winter they had to go up and down the long staircase, and out through the snow before they could meet.

「あれはね、白いみつばちがあつまって、とんでいるのだよ。」と、おばあさんがいいました。

“See there are the white bees swarming,” said Kay’s old grandmother one day when it was snowing.

「あのなかにも、女王ばちがいるの。」と、男の子はたずねました。この子は、ほんとうのみつばちに、そういうもののいることを、しっていたのです。

“Have they a queen bee?” asked the little boy, for he knew that the real bees had a queen.

## The Snow Queen

「ああ、いるともさ。」と、おばあさんはいきました。「その女王ばちは、いつもたくさんなかまのあつまっているところに、とんでいるのだよ。なかまのなかでも、いちばんからだが大きくて、けっして下にじっとしてはいない。すぐと黒い雲のなかへとんではいってしまう。ま夜中に、いく晩も、いく晩も、女王は町の通から通へとびまわって、窓のところをのぞくのさ。するとふしぎとそこでこおってしまって、窓は花をふきつけたように、見えるのだよ。」

「ああ、それ、みたことがありますよ。」と、こどもたちは、口をそろえて叫さけびました。そして、すると、これはほんとうの話なのだ、とおもいました。

「雪の女王さまは、うちのなかへもはいつてこられるかしら。」と、女の子がたずねました。

“To be sure they have,” said the grandmother. “She is flying there where the swarm is thickest. She is the largest of them all, and never remains on the earth, but flies up to the dark clouds. Often at midnight she flies through the streets of the town, and looks in at the windows, then the ice freezes on the panes into wonderful shapes, that look like flowers and castles.”

“Yes, I have seen them,” said both the children, and they knew it must be true.

“Can the Snow Queen come in here?” asked the little girl.

## 雪の女王

「くるといいな。そうすれば、ぼく、それをあたたかいストーブの上ののせてやるよ。すると女王はとろけてしまうだろう。」と、男の子がいました。

“Only let her come,” said the boy, “I’ll set her on the stove and then she’ll melt.”

でも、おばあさんは、男の子のかみの毛をなでながら、ほかのお話をしてくれました。

Then the grandmother smoothed his hair and told him some more tales.

その夕方、カイはうちにいて、着物きものを半分はんぶんぬぎかけながら、ふとおもいついて、窓のそばの、いすの上にあがって、れいのちいさなのぞきあなから、外をながめました。おもてには、ちらちら、こな雪が舞まっていたが、そのなかで大きなかたまりがひとひら、植木箱のはしにおちました。するとみるみるそれは大きくなって、とうとうそれが、まがない、わかい、ひとりの女の子の人になりました。もう何百万という数の、星のように光るこな雪で織おった、うすい白い紗しゃの着物きものを着ていました。

One evening, when little Kay was at home, half undressed, he climbed on a chair by the window and peeped out through the little hole. A few flakes of snow were falling, and one of them, rather larger than the rest, alighted on the edge of one of the flower boxes. This snow-flake grew larger and larger, till at last it became the figure of a woman, dressed in garments of white gauze, which looked like millions of starry snow-flakes linked together.

## The Snow Queen

やさしい女の姿はしていましたが、氷のからだをしていました。きらきらひかる氷のからだをして、そのくせ生きているのです。その目は、あかるい星をふたつならべたようでしたが、おちつきも休みもない目でした。

She was fair and beautiful, but made of ice—shining and glittering ice. Still she was alive and her eyes sparkled like bright stars, but there was neither peace nor rest in their glance.

女は、カイのいる窓のほうに、うなずきながら、手まねぎしました。カイはびっくりして、いすからとびおりてしまいました。すぐそのあとで、大きな鳥が、窓の外をとんだような、けはいがしました。

She nodded towards the window and waved her hand. The little boy was frightened and sprang from the chair; at the same moment it seemed as if a large bird flew by the window.



## 雪の女王

そのあくる日は、からりとした、霜日しもびよりでした。――それからは、日にまし、雪どけのようきになって、とうとう春が、やってきました。お日さまはあたたかに、照てりかがやいて、緑みどりもえだし、つばめは巣をつくりはじめました。あのむかいあわせの屋根うらべやの窓も、また、あけひろげられて、カイとゲルダとは、アパートのてっぺんの屋根上の雨あまどいの、ちいさな花ぞので、ことしもあそびました。

この夏は、じつにみごとに、ばらの花がさきました。女の子のゲルダは、ばらのことのうたわれている、さんび歌をっていました。そして、ばらの花というと、ゲルダはすぐ、じぶんの花ぞののばらのことをかんがえました。ゲルダは、そのさんび歌を、カイにうたってきかせますと、カイもいっしょにうたいました。

On the following day there was a clear frost, and very soon came the spring. The sun shone; the young green leaves burst forth; the swallows built their nests; windows were opened, and the children sat once more in the garden on the roof, high above all the other rooms.

How beautiful the roses blossomed this summer. The little girl had learnt a hymn in which roses were spoken of, and then she thought of their own roses, and she sang the hymn to the little boy, and he sang too:—

## The Snow Queen

「ばらのはな さきてはちり  
ぬ  
おさなごエス やがてあおが  
ん」

*"Roses bloom and cease to be,  
But we shall the Christ-child see."*

ふたりのこどもは、手を取り  
あって、ばらの花にほおずり  
して、神さまの、みひかりの  
かがやく、お日さまをながめ  
て、おさなごエスが、そこ  
に、おいでになるかのよう  
に、うたいかけました。

Then the little ones held each other by the hand,  
and kissed the roses, and looked at the bright  
sunshine, and spoke to it as if the Christ-child were  
there.

なんという、楽しい夏の日だ  
ったでしょう。いきいきと、  
いつまでもさくことをやめな  
いようにみえる、ばらの花の  
においと、葉のみどりにつつ  
まれた、この屋根の上は、な  
んていいところでしたらう。

Those were splendid summer days. How beautiful  
and fresh it was out among the rose-bushes, which  
seemed as if they would never leave off blooming.

## 雪の女王

カイとゲルダは、ならんで掛けて、けものや鳥のかいてある、絵本をみていました。ちょうどそのとき——お寺の、大きな塔とうの上で、とけいが、五つうちましたが——カイは、ふと、  
「あッ、なにかちくりとむねにささったよ。それから、目にもなにかとびこんだようだ。」と、いいました。

あわてて、カイのくびを、ゲルダがかかえると、男の子は目をぱちぱちやりました。でも、目のなかにはなにもみえませんでした。

「じゃあ、とれてしまったのだろう。」と、カイはいいましたが、それは、とれたものではありませんでした。

One day Kay and Gerda sat looking at a book full of pictures of animals and birds, and then just as the clock in the church tower struck twelve, Kay said, "Oh, something has struck my heart!" and soon after, "There is something in my eye."

The little girl put her arm round his neck, and looked into his eye, but she could see nothing.

"I think it is gone," he said. But it was not gone;

## The Snow Queen

カイの目にはいったのは、れいの鏡から、とびちったかけらでした。そら、おぼえているでしょう。あのいやな、魔法まほうの鏡のかけらで、その鏡にうつすと、大きくていいものも、ちいさく、いやなものに、みえるかわり、いけないわるいものほど、いっそうきわだってわるく見え、なんによらず、物事ものごとのあらが、すぐめだって見えるのです。

it was one of those bits of the looking-glass—that magic mirror, of which we have spoken—the ugly glass which made everything great and good appear small and ugly, while all that was wicked and bad became more visible, and every little fault could be plainly seen.

かわいそうに、カイは、しんぞうに、かけらがひとつはいってしまいましたから、まもなく、それは氷のかたまりのように、なるでしょう。

Poor little Kay had also received a small grain in his heart, which very quickly turned to a lump of ice.

それなり、もういたみはしませんけれども、たしかに、しんぞうの中にのこりました。

He felt no more pain, but the glass was there still.

## 雪の女王

「なんだってべそをかくん  
だ。」と、カイはいいまし  
た。「そんなみっともない顔  
をして、ぼくは、もうどうも  
なってやしないんだよ。」

「チェッ、なんだい。」こん  
なふうには、カイはふいに、い  
いだしました。「あのばらは  
虫がくっているよ。このばら  
も、ずいぶんへんてこなばら  
だ。みんなきたならしいばら  
だな。植わっている箱も箱な  
ら、花も花だ。」

こういって、カイは、足で  
植木の箱をけとばして、ばら  
の花をひきちぎってしまいま  
した。

「カイちゃん、あんた、なに  
をするの。」と、ゲルダはさ  
げびました。

カイは、ゲルダのおどろい  
た顔を見ると、またほかのば  
らの花を、もぎりだしまし  
た。それから、じぶんのうち  
の窓の中にとびこんで、やさ  
しいゲルダとも、はなれてし  
まいました。

“Why do you cry?” said he at last; “it makes you  
look ugly. There is nothing the matter with me now.  
Oh, see!” he cried suddenly, “that rose is worm-  
eaten, and this one is quite crooked. After all they  
are ugly roses, just like the box in which they  
stand,” and then he kicked the boxes with his foot,  
and pulled off the two roses.

“Kay, what are you doing?” cried the little girl; and  
then, when he saw how frightened she was, he tore  
off another rose, and jumped through his own  
window away from little Gerda.

## The Snow Queen

ゲルダがそのあとで、絵本えほんをもってあそびにきたとき、カイは、そんなもの、かあさんにだっこされている、あかんぼのみるものだ、といいました。また、おばあさまがお話をして、カイはのべつに「だって、だって。」とばかりいっていました。それどころか、すきを見て、おばあさまのうしろにまわって、目がねをかけて、おばあさまの口まねまで、してみせました。しかも、なかなかじょうずにやったので、みんなはおかしがってわらいました。

まもなくカイは、町じゅうの人たちの、身ぶりや口まねでも、できるようになりました。

When she afterwards brought out the picture book, he said, "It was only fit for babies in long clothes," and when grandmother told any stories, he would interrupt her with "but;". Or, when he could manage it, he would get behind her chair, put on a pair of spectacles, and imitate her very cleverly, to make people laugh.

By-and-by he began to mimic the speech and gait of persons in the street.

## 雪の女王

なんでも、ひとくせかわったことや、みっともないことなら、カイはまねすることをおぼえました。

「あの子はきっと、いいあたまなのにながいない。」と、みんないいましたが、それは、カイの目のなかにはいった鏡のかけらや、しんぞうの奥ふかくささった、鏡のかけらのさせることでした。そんなわけで、カイはまごころをささげて、じぶんをしたってくれるゲルダまでも、いじめだしました。

カイのあそびも、すっかりかわって、ひどくこましゃくれたものになりました。――ある冬の日、こな雪がさかんに舞いくるっているなかで、カイは大きな虫目がねをもって、そとにでました。そして青いうわぎのすそをひろげて、そのうえにふってくる雪をうけました。

All that was peculiar or disagreeable in a person he would imitate directly, and people said, "That boy will be very clever; he has a remarkable genius." But it was the piece of glass in his eye, and the coldness in his heart, that made him act like this. He would even tease little Gerda, who loved him with all her heart.

His games, too, were quite different; they were not so childish. One winter's day, when it snowed, he brought out a burning-glass, then he held out the tail of his blue coat, and let the snow-flakes fall upon it.

## The Snow Queen

「さあ、この目がねのところからのぞいてごらん、ゲルダちゃん。」と、カイはいいました。なるほど、雪のひとひらが、ずっと大きく見えて、みごとにひらいた花か、六角の星のようで、それはまったくうつくしいものでありました。

“Look in this glass, Gerda,” said he; and she saw how every flake of snow was magnified, and looked like a beautiful flower or a glittering star.

「ほら、ずいぶんたくみにできているだろう。ほんとうの花なんか見るよりも、ずっとおもしろいよ。かけたところなんか、ひとつだってないものね。きちんと形をくずさずにいるのだよ。ただとけさえしなければね。」と、カイはいいました。

“Is it not clever?” said Kay, “and much more interesting than looking at real flowers. There is not a single fault in it, and the snow-flakes are quite perfect till they begin to melt.”

そののちまもなく、カイはあつい手ぶくろをはめて、そりをついで、やってきました。そしてゲルダにむかって、

Soon after Kay made his appearance in large thick gloves, and with his sledge at his back. He called up stairs to Gerda, “I’ve got to leave to go into the great square, where the other boys play and ride.” And away he went.

「ぼく、ほかのこどもたちのあそんでいる、ひろばのほうへいってもいいと、いわれたのだよ。」と、ささやくと、そのままいってしまいました。



## 雪の女王

その大きなひろばでは、こどもたちのなかでも、あつかましいのが、そりを、おひやくしょうたちの馬車の、うしろにいわえつけて、じょうずに馬車といっしょにすべっていました。これは、なかなかおもしろいことでした。

こんなことで、こどもたちたれも、むちゅうになってあそんでいると、そこへ、いちだい、大きなそりがやってきました。それは、まっ白にぬってあって、なかにたれだか、そまつな白い毛皮けがわにくるまって、白いそまつなぼうしをかぶった人がのっていました。そのそりは二回ばかり、ひろばをぐるぐるまわりました。そこでカイは、さっそくそれに、じぶんのちいさなそりを、しばりつけて、いっしょにすべっていきました。

In the great square, the boldest among the boys would often tie their sledges to the country people's carts, and go with them a good way. This was capital.

But while they were all amusing themselves, and Kay with them, a great sledge came by; it was painted white, and in it sat some one wrapped in a rough white fur, and wearing a white cap. The sledge drove twice round the square, and Kay fastened his own little sledge to it, so that when it went away, he followed with it.

## The Snow Queen

その大そりは、だんだんはやくすべって、やがて、つぎの大通を、まっすぐに、はしっていきました。そりをはしらせていた人は、くるりとふりかえって、まるでよくカイをしっているように、なれなれしいようすで、うなずきましたので、カイはついそりをとくのをやめてしまいました。こんなぐあいにして、とうとうそりは町の門のそとに、でてしまいました。

そのとき、雪が、ひどくふってきたので、カイはじぶんの手のさきもみることができませんでした。それでもかまわず、そりははしっていきました。カイはあせって、しきりとつなをうごかして、その大そりからはなれようとしましたが、小そりはしっかりと大そりにしばりつけられていて、どうにもなりませんでした。ただもう、大そりにひっぱられて、風のようにとんでいきました。

It went faster and faster right through the next street, and then the person who drove turned round and nodded pleasantly to Kay, just as if they were acquainted with each other, but whenever Kay wished to loosen his little sledge the driver nodded again, so Kay sat still, and they drove out through the town gate.

Then the snow began to fall so heavily that the little boy could not see a hand's breadth before him, but still they drove on; then he suddenly loosened the cord so that the large sled might go on without him, but it was of no use, his little carriage held fast, and away they went like the wind.

## 雪の女王

カイは大声をあげて、すくいをもとめました。たれの耳にも、きこえませんでした。雪はぶっつけるようにふりしきりました。そりは前へ前へと、とんでいきました。ときどき、そりがとびあがるのは、生いけがきや、おほりの上を、とびこすのでしょうか、

Then he called out loudly, but nobody heard him, while the snow beat upon him, and the sledge flew onwards. Every now and then it gave a jump as if it were going over hedges and ditches.

カイはまったくふるえあがってしまいました。主のおいのりをしようと思っても、あたまにうかんでくるのは、かけざんの九九ばかりでした。

The boy was frightened, and tried to say a prayer, but he could remember nothing but the multiplication table.

こな雪のかたまりは、だんだん大きくなって、しまいは、大きな白いにわたりのようになりました。ふとその雪のにわたりが、両がわにとびたちました。とたんに、大そりはとまりました。そりをはしらせていた人が、たちあがったのを見ると、毛皮のがいたうもぼうしも、すっかり雪でできていました。それはすらりと、背の高い、目のくらむようにまっ白な女の人でした。それが雪の女王だったのです。

The snow-flakes became larger and larger, till they appeared like great white chickens. All at once they sprang on one side, the great sledge stopped, and the person who had driven it rose up. The fur and the cap, which were made entirely of snow, fell off, and he saw a lady, tall and white, it was the Snow Queen.

## The Snow Queen

「ずいぶんよくはしかったわね。」と、雪の女王はいいました。「あら、あんた、ふるえているのね。わたしのくまの毛皮におはいいり。」

こういいながら女王は、カイをじぶんのそりにいれて、かたわらにすわらせ、カイのからだに、その毛皮をかけてやりました。するとカイは、まるで雪のふきつもったなかに、うずめられたように感じました。

「まださむいの。」と、女王はたずねました。それからカイのひたいに、ほおをつけました。

“We have driven well,” said she, “but why do you tremble? here, creep into my warm fur.” Then she seated him beside her in the sledge, and as she wrapped the fur round him he felt as if he were sinking into a snow drift.

“Are you still cold,” she asked, as she kissed him on the forehead.

## 雪の女王

まあ、それは、氷よりももっとつめたい感じでした。そして、もう半分氷のかたまりになりかけていた、カイのしんぞうに、じいんとしみわたりました。カイはこのまま死んでしまうのではないかと、おもいました。――けれど、それもほんのわずかのあいだで、やがてカイは、すっかり、きもちがよくなって、もう身のまわりのさむさなど、いっこう気にならなくなりました。

「ぼくのそりは――ぼくのそりを、わすれちゃいけない。」

カイがまず第一におもいだしたのは、じぶんのそりのことでありました。そのそりは、白いにわとりのうちの一わに、しっかりとむすびつけられました。このにわとりは、そりをせなかにのせて、カイのうしろでとんでいました。

The kiss was colder than ice; it went quite through to his heart, which was already almost a lump of ice; he felt as if he were going to die, but only for a moment; he soon seemed quite well again, and did not notice the cold around him.

“My sledge! don’t forget my sledge,” was his first thought, and then he looked and saw that it was bound fast to one of the white chickens, which flew behind him with the sledge at its back.

## The Snow Queen

雪の女王は、またもういちど、カイにほおずりしました。それで、カイは、もう、かわいらしいゲルダのことも、おばあさまのことも、うちのことも、なにもかも、すっかりわすれてしまいました。

「さあ、もうほおずりはやめましょうね。」と、雪の女王はいいました。「このうえすると、お前を死なせてしまうかもしれないからね。」

カイは女王をみあげました。まあそのうつくしいことといたら。カイは、これだけかしくそうなりっぱな顔がほかにあろうとは、どうしたっておもえませんでした。いつか窓のところにきて、手まねきしてみせたときとちがって、もうこの女王が、氷でできているとは、おもえなくなりました。

The Snow Queen kissed little Kay again, and by this time he had forgotten little Gerda, his grandmother, and all at home.

“Now you must have no more kisses,” she said, “or I should kiss you to death.”

Kay looked at her, and saw that she was so beautiful, he could not imagine a more lovely and intelligent face; she did not now seem to be made of ice, as when he had seen her through his window, and she had nodded to him.

## 雪の女王

カイの目には、女王は、申しぶんなくかんぜんで、おそろしいなどとは、感じなくなりました。それでうちとけて、じぶんは分数ぶんすうまでも、あんざんで、できることや、じぶんの国が、いく平方マイルあって、どのくらいの人口があるか、知っていることまで、話しました。女王は、しじゅう、にこにこして、それをきいていました。それが、なんだ、知っていることは、それっばかりかと、いわれたようにおもって、あらためて、ひろいひろい大空をあおぎました。すると、女王はカイをつれて、たかくとびました。高い黒雲の上までも、とんで行きました。あらしはざあざあ、ひゅうひゅう、ふきすきすきで、昔の歌でもうたっているようでした。

In his eyes she was perfect, and he did not feel at all afraid. He told her he could do mental arithmetic, as far as fractions, and that he knew the number of square miles and the number of inhabitants in the country. And she always smiled so that he thought he did not know enough yet, and she looked round the vast expanse as she flew higher and higher with him upon a black cloud, while the storm blew and howled as if it were singing old songs.

## The Snow Queen

女王とカイは、森や、湖や、海や、陸の上を、とんで行きました。下のほうでは、つめたい風がごうごううなって、おおかみのむれがほえたり、雪がしゃっしゃっときしったりして、その上に、まっくろなからすがカアカアないでとんでいました。しかし、はるか上のほうには、お月さまが、大きくこうこうと、照っていました。このお月さまを、ながいながい冬の夜じゅう、カイはながめてあかしました。ひるになると、カイは女王の足もとでねむりました。

第三のお話。魔法の使える  
女の花ぞの

ところで、カイが、あれなりかえってこなかったとき、あの女の子のゲルダは、どうしたでしょう。

They flew over woods and lakes, over sea and land; below them roared the wild wind; the wolves howled and the snow crackled; over them flew the black screaming crows, and above all shone the moon, clear and bright,—and so Kay passed through the long winter's night, and by day he slept at the feet of the Snow Queen.

Third Story: The Flower  
Garden of the Woman Who  
Could Conjure

But how fared little Gerda during Kay's absence?



## 雪の女王

カイはまあどうしたのか、たれもしりませんでした。なんの手がかりもえられませんでした。こどもたちの話でわかったのは、カイがよその大きなそりに、じぶんのそりをむすびつけて、町をはしりまわって、町の門からそとへでていったということだけでした。

さて、それからカイがどんなことになってしまったか、たれもしっているものはありませんでした。いくにんもの人のなみだが、この子のために、そそがれました。そして、あのゲルダは、そのうちでも、ひとり、もうながいあいだ、むねのやぶれるほどになきました。――みんなのうわさでは、カイは町のすぐそばを流れている川におちて、おぼれてしまったのだらうということでした。ああ、まったくながいながい、いんきな冬でした。

いま、春はまた、あたたかいお日さまの光とつれだってやってきました。

What had become of him, no one knew, nor could any one give the slightest information, excepting the boys, who said that he had tied his sledge to another very large one, which had driven through the street, and out at the town gate.

Nobody knew where it went; many tears were shed for him, and little Gerda wept bitterly for a long time. She said she knew he must be dead; that he was drowned in the river which flowed close by the school. Oh, indeed those long winter days were very dreary.

But at last spring came, with warm sunshine.

## The Snow Queen

「カイちゃんは死んでしまったのよ。」と、ゲルダはいいました。

“Kay is dead and gone,” said little Gerda.

「わたしはそうおもわないね。」と、お日さまがいました。

“I don’t believe it,” said the sunshine.

「カイちゃんは死んでしまったのよ。」と、ゲルダはつばめにいいました。

“He is dead and gone,” she said to the sparrows.

「わたしはそうおもいません。」と、つばめたちはこたえました。そこで、おしまいに、ゲルダは、じぶんでも、カイは死んだのではないと、おもうようになりました。

“We don’t believe it,” they replied; and at last little Gerda began to doubt it herself.

「あたし、あたらしい赤いくつをおろすわ。あれはカイちゃんのまだみなかったくつよ。あれをはいて川へおりて行って、カイちゃんのことをきいてみましょう。」と、ゲルダは、ある朝いいました。

“I will put on my new red shoes,” she said one morning, “those that Kay has never seen, and then I will go down to the river, and ask for him.”

で、朝はやかったので、ゲルダはまだねむっていたおばあさまに、せっぷんして、赤いくつをはき、たったひとりぼっちで、町の門を出て、川のほうへあるいていきました。

It was quite early when she kissed her old grandmother, who was still asleep; then she put on her red shoes, and went quite alone out of the town gates toward the river.

## 雪の女王

「川さん、あなたが、わたしのすきなおともだちを、とって行ってしまったというのは、ほんとうなの。この赤いくつをあげるわ。そのかわり、カイちゃんをかえしてね。」

“Is it true that you have taken my little playmate away from me?” said she to the river. “I will give you my red shoes if you will give him back to me.”

すると川の水が、よしよしというように、みょうに波だってみえたので、ゲルダはじぶんのもっているもののなかでいちばんすきだった、赤いくつをぬいで、ふたつとも、川のなかになげこみました。ところが、くつは岸の近くにおちたので、さざ波がすぐ、ゲルダの立っているところへ、くつをはこんできてしまいました。まるで川は、ゲルダから、いちばんだいじなものをもろうことをのぞんでいないように見えました。なぜなら、川はカイをかくしてはいなかったからです。

And it seemed as if the waves nodded to her in a strange manner. Then she took off her red shoes, which she liked better than anything else, and threw them both into the river, but they fell near the bank, and the little waves carried them back to the land, just as if the river would not take from her what she loved best, because they could not give her back little Kay.

## The Snow Queen

けれど、ゲルダは、くつをもっととおくのほうへなげないからいけなかったのだとおもいました。そこで、あしのしげみにうかんでいた小舟にのりました。そして舟のいちばんはしへ行って、そこからくつをなげこみました。でも、小舟はしっかりと岸にもやってなかったのので、くつをなげるので動かしたひょうしに、岸からすべり出してしまいました。

But she thought the shoes had not been thrown out far enough. Then she crept into a boat that lay among the reeds, and threw the shoes again from the farther end of the boat into the water, but it was not fastened. And her movement sent it gliding away from the land.

それに気がついて、ゲルダは、いそいでひっかえそうとしましたが、小舟のこちらのはしまでこないうちに、舟は二三尺にさんじゃくも岸からはなれて、そのまま、どんどんはやく流れていきました。

When she saw this she hastened to reach the end of the boat, but before she could so it was more than a yard from the bank, and drifting away faster than ever.



## 雪の女王

そこで、ゲルダは、たいそうびっくりして、なきだしましたが、すずめのほかは、たれもその声をきくものはありませんでした。すずめには、ゲルダをつれかえる力はありませんでした。でも、すずめたちは、岸にそってとびながら、ゲルダをなぐさめるように、「だいじょうぶ、ぼくたちがいます。」と、なきました。

小舟は、ずんずん流れにはこばれていきました。ゲルダは、足にくつしたをはいただけで、じっと舟のなかにすわったままでいました。ちいさな赤いくつは、うしろのほうで、ふわふわういていましたが、小舟においつくことはできませんでした。小舟のほうが、くつよりも、もっとはやくながれていったからです。

Then little Gerda was very much frightened, and began to cry, but no one heard her except the sparrows, and they could not carry her to land, but they flew along by the shore, and sang, as if to comfort her, "Here we are! Here we are!"

The boat floated with the stream; little Gerda sat quite still with only her stockings on her feet; the red shoes floated after her, but she could not reach them because the boat kept so much in advance.

## The Snow Queen

岸は、うつくしいけしきでした。きれいな花がさいていたり、古い木が立っていたり、ところどころ、なだらかな土手どてには、ひつじやめうしが、あそんでいました。でも、にんげんの姿は見えませんでした。

「ことによると、この川は、わたしを、カイちゃんのところへ、つれていってくれるのかもしれないわ。」と、ゲルダはかんがえました。

それで、だんだんげんきがでてきたので、立ちあがって、ながいあいだ、両方の青あおとうつくしい岸をながめていました。

それからゲルダは、大きなさくらんぼばたけのところにきました。そのはたけの中には、ふうがわりな、青や赤の窓のついた、一けんのちいさな家がたっていました。その家のかやぶきで、おもてには、舟で通りすぎる人たちのほうにむいて、木製もくせいのふたりのへいたいが、銃剣じゅうけん肩に立っていました。

The banks on each side of the river were very pretty. There were beautiful flowers, old trees, sloping fields, in which cows and sheep were grazing, but not a man to be seen.

Perhaps the river will carry me to little Kay, thought Gerda, and then she became more cheerful, and raised her head, and looked at the beautiful green banks; and so the boat sailed on for hours.

At length she came to a large cherry orchard, in which stood a small red house with strange red and blue windows. It had also a thatched roof, and outside were two wooden soldiers, that presented arms to her as she sailed past.

## 雪の女王

ゲルダは、それをほんとうのへいたいかとおもって、こえをかけました。しかし、いうまでもなくそのへいたいは、なんのこたえもしませんでした。ゲルダはすぐそのそばまでできました。波が小舟を岸のほうにはこんだからです。

Gerda called out to them, for she thought they were alive, but of course they did not answer. And as the boat drifted nearer to the shore, she saw what they really were.

ゲルダはもっと大きなこえで、よびかけてみました。すると、その家のなかから、撞木杖しゅもくづえにすぎた、たいそう年とったおばあさんが出てきました。おばあさんは、目のさめるようにきれいな花をかいた、大きな夏ぼうしをかぶっていました。

Then Gerda called still louder, and there came a very old woman out of the house, leaning on a crutch. She wore a large hat to shade her from the sun, and on it were painted all sorts of pretty flowers.

「やれやれ、かわいそうに。どうしておまえさんは、そんなに大きな波のたつ上を、こんなとおいところまで流れてきたのだね。」と、おばあさんはいいました。

“You poor little child,” said the old woman, “how did you manage to come all this distance into the wide world on such a rapid rolling stream?” And then the old woman walked in the water, seized the boat with her crutch, drew it to land, and lifted Gerda out.

それからおばあさんは、ざぶりざぶり水の中にはいて、撞木杖で小舟をおさえて、それを陸おかのほうへひっぱってきて、ゲルダをだきおろしました。

## The Snow Queen

ゲルダはまた陸にあがることのできたのをうれしいとおもいました。でも、このみなれないおばあさんは、すこし、こわいようでした。

「さあ、おまえさん、名まえをなんといいのだから、またどうして、ここへやってきたのだから、話してごらん。」とおばあさんはいいました。

そこでゲルダは、なにもかも、おばあさんに話しました。おばあさんはうなずきながら、「ふん、ふん。」と、いいました。ゲルダは、すっかり話してしまってから、おばあさんがカイをみかけなかったかどうか、たずねますと、おばあさんは、カイはまだここを通らないが、いずれそのうち、ここを通るかもしれない。まあ、そう、くよくよおもわないで、花をながめたり、さくらんぼをたべたりしておいで。花はどんな絵本のよりも、ずっときれいだし、その花びらの一まい、一まいが、ながいお話をしてくれるだろうからといいました。

And Gerda was glad to feel herself on dry ground, although she was rather afraid of the strange old woman.

“Come and tell me who you are,” said she, “and how came you here.”

Then Gerda told her everything, while the old woman shook her head, and said, “Hem-hem;” and when she had finished, Gerda asked if she had not seen little Kay, and the old woman told her he had not passed by that way, but he very likely would come. So she told Gerda not to be sorrowful, but to taste the cherries and look at the flowers; they were better than any picture-book, for each of them could tell a story.



## 雪の女王

それからおばあさんは、ゲルダの手をとって、じぶんのちいさな家へつれて行って、中から戸にかぎをかけました。

Then she took Gerda by the hand and led her into the little house, and the old woman closed the door.

その家の窓は、たいそう高く、赤いのや、青いのや、黄いろの窓ガラスだったので、お日さまの光はおもしろい色にかわって、きれいに、へやのなかにさしこみました。つくえの上には、とてもおいしいさくらんぼがおいてありました。そしてゲルダは、いくらたべてもいいという、おゆるしがたものですから、おもうぞんぶんそれをたべました。

The windows were very high, and as the panes were red, blue, and yellow, the daylight shone through them in all sorts of singular colors. On the table stood beautiful cherries, and Gerda had permission to eat as many as she would.

ゲルダがさくらんぼをたべているあいだに、おばあさんが、金のくしで、ゲルダのかみの毛をすきました。そこで、ゲルダのかみの毛は、ばらの花のような、まるっこくて、かわいらしい顔のまわりで、金色にちりちりまいて、光っていました。

While she was eating them the old woman combed out her long flaxen ringlets with a golden comb, and the glossy curls hung down on each side of the little round pleasant face, which looked fresh and blooming as a rose.

## The Snow Queen

「わたしは長いあいだ、おまえのような、かわいらしい女の子がほしいとおもっていたのだよ。さあこれから、わたしたちといっしょに、なかよくくらそうね。」と、おばあさんはいいました。

“I have long been wishing for a dear little maiden like you,” said the old woman, “and now you must stay with me, and see how happily we shall live together.”

そしておばあさんが、ゲルダのかみの毛にくしをいれてやっているうちに、ゲルダはだんだん、なかよしのカイのことなどはわすれてしまいました。というのは、このおばあさんは魔法まほうが使えるからでした。けれども、おばあさんは、わるい魔女まじよではありませんでした。おばあさんはじぶんのたのしみに、ほんのすこし魔法を使うだけで、こんども、それをつかったのは、ゲルダをじぶんの手もおきたいためでした。

And while she went on combing little Gerda's hair, she thought less and less about her adopted brother Kay, for the old woman could conjure, although she was not a wicked witch; she conjured only a little for her own amusement, and now, because she wanted to keep Gerda.

## 雪の女王

そこで、おばあさんは、庭へ出て、そのばらの木にむかって、かたっぱしから撞木杖をあてました。すると、いままでうつくしく、さきほこっていたばらの木も、みんな、黒い土の中にしずんでしまったので、もうたれの目にも、どこにいままでばらの木があったか、わからなくなりました。

Therefore she went into the garden, and stretched out her crutch towards all the rose-trees, beautiful though they were; and they immediately sunk into the dark earth, so that no one could tell where they had once stood.

おばあさんは、ゲルダがばらを見て、自分の家のばらのことをかんがえ、カイのことをおもいだして、ここからにげていってしまうといけなとおもったのです。

The old woman was afraid that if little Gerda saw roses she would think of those at home, and then remember little Kay, and run away.

さて、ゲルダは花ぞのにあんないされました。――そこは、まあなんという、いい香りがあふれていて、目のさめるように、きれいなところでしたらう。花という花は、こぼれるようにさいていました。そこでは、一ねんじゅう花がさいていました。どんな絵本の花だって、これよりうつくしく、これよりにぎやかな色にさいてはいませんでした。

Then she took Gerda into the flower-garden. How fragrant and beautiful it was! Every flower that could be thought of for every season of the year was here in full bloom; no picture-book could have more beautiful colors.

## The Snow Queen

ゲルダはおどりがあがってよろこびました。そして夕日が、高いさくらの木のむこうにはいってしまうまで、あそびました。それからゲルダは、青いすみれの花がいっぱいあった、赤い絹のクッションのある、きれいなベッドの上で、結婚式の日女王さまのような、すばらしい夢をむすびました。

Gerda jumped for joy, and played till the sun went down behind the tall cherry-trees; then she slept in an elegant bed with red silk pillows, embroidered with colored violets; and then she dreamed as pleasantly as a queen on her wedding day.

そのあくる日、ゲルダは、また、あたたかいお日さまのひかりをあびて、花たちとあそびました。こんなふうにして、いく日もいく日もたちました。

The next day, and for many days after, Gerda played with the flowers in the warm sunshine.

ゲルダは花ぞのの花をのこらずしりました。そのくせ、花ぞのの花は、かずこそずいぶんたくさんありましたけれど、ゲルダにとっては、どうもまだなにか、ひといろたりないようにおもわれました。でも、それがなんの花であるか、わかりませんでした。

She knew every flower, and yet, although there were so many of them, it seemed as if one were missing, but which it was she could not tell.

## 雪の女王

するうちある日、ゲルダはなにげなくすわって、花をかいたおばあさんの夏ぼうしを、ながめていましたが、その花のうちで、いちばんうつくしいのは、ばらの花でした。

One day, however, as she sat looking at the old woman's hat with the painted flowers on it, she saw that the prettiest of them all was a rose.

おばあさんは、ほかのばらの花をみんな見えないように、かくしたくせに、じぶんのぼうしにかいたばらの花を、けすことを、ついわすれていたのです。

The old woman had forgotten to take it from her hat when she made all the roses sink into the earth.

まあ手ぬかりということは、たれにでもあるものです。

But it is difficult to keep the thoughts together in everything; one little mistake upsets all our arrangements.

## The Snow Queen

「あら、ここのお庭には、ばらが無いわ。」と、ゲルダはさげびました。

それから、ゲルダは、花ぞのを、いくどもいくども、さがしまわりましたけれども、ばらの花は、ひとつもみつかりませんでした。そこで、ゲルダは、花ぞのにすわってなきました。ところが、なみだが、ちょうどばらがうずめられた場所の上におちました。あたたかいなみだが、しっとりと土をしめらすと、ばらの木は、みるみるしずまない前とおなじように、花をいっばいつけて、地の上にあらわれてきました。ゲルダはそれをだいて、せっぷんしました。そして、じぶんのうちのばらをおもいだし、それといっしょに、カイのこともおもいだしました。

“What, are there no roses here?” cried Gerda; and she ran out into the garden, and examined all the beds, and searched and searched. There was not one to be found. Then she sat down and wept, and her tears fell just on the place where one of the rose-trees had sunk down. The warm tears moistened the earth, and the rose-tree sprouted up at once, as blooming as when it had sunk. And Gerda embraced it and kissed the roses, and thought of the beautiful roses at home, and, with them, of little Kay.

## 雪の女王

「まあ、あたし、どうして、こんなところにひきとめられていたのかしら。」と、ゲルダはいいました。「あたし、カイちゃんをさがさなくてはならなかったのだわ——カイちゃん、どこにいるか、しらなくて。あなたは、カイちゃんが死んだとおもって。」と、ゲルダは、ばらにききました。

「カイちゃんは死にはしませんよ。わたしどもは、いままですで地のなかにいました。そこには死んだ人はみないましたが、でも、カイちゃんはみえませんでしたよ。」と、ばらの花がこたえました。

「ありがとう。」と、ゲルダは行って、ほかの花のところへ行って、ひとつひとつ、うてなのなかをのぞきながらたずねました。「カイちゃんはどこにいるか、しらなくて。」

“Oh, how I have been detained!” said the little maiden, “I wanted to seek for little Kay. Do you know where he is?” she asked the roses; “do you think he is dead?”

And the roses answered, “No, he is not dead. We have been in the ground where all the dead lie; but Kay is not there.”

“Thank you,” said little Gerda, and then she went to the other flowers, and looked into their little cups, and asked, “Do you know where little Kay is?”

## The Snow Queen

でも、どの花も、日なたぼっこしながら、じぶんたちのつくったお話や、おとぎばなしのことばかりかんがえていました。ゲルダはいろいろと花にきいてみましたが、どの花もカイのことについては、いっこうにしりませんでした。

ところで、おにゆりは、なんと  
いったでしょう。

But each flower, as it stood in the sunshine, dreamed only of its own little fairy tale of history. Not one knew anything of Kay. Gerda heard many stories from the flowers, as she asked them one after another about him.

And what, said the tiger-lily?



## 雪の女王

「あなたには、たいこの音が、ドンドンというのがきこえますか。あれには、ふたつの音しかないのです。だからドンドンといつでもやっているのです。女たちがうたう、とむらいのうたをおききなさい。また、坊ぼうさんのあげる、おいのりをおききなさい。——インド人じんのやもめは、火葬かそうのたきぎのつまれた上に、ながい赤いマントをまとして立っています。焰ほのおがその女と、死んだ夫おっとのしかばねのまわりにたちのぼります。でもインドの女は、ぐるりにあつまった人たちのなかの、生きているひとりの男のことをかかんがえているのです。その男の目は焰よりもあつくもえ、その男のやくような目つきは、やがて、女のからだをやきつくして灰にする焰などよりも、もっとはげしく、女の心の中で、もえていたのです。心の焰は、火あぶりのたきぎのなかで、もえつきるものでしょうか。」

“Hark, do you hear the drum?— ‘turn, turn,’—there are only two notes, always, ‘turn, turn.’ Listen to the women’s song of mourning! Hear the cry of the priest! In her long red robe stands the Hindoo widow by the funeral pile. The flames rise around her as she places herself on the dead body of her husband; but the Hindoo woman is thinking of the living one in that circle; of him, her son, who lighted those flames. Those shining eyes trouble her heart more painfully than the flames which will soon consume her body to ashes. Can the fire of the heart be extinguished in the flames of the funeral pile?”

## The Snow Queen

「なんのことだか、まるでわからないわ。」と、ゲルダがこたえました。

"I don't understand that at all," said little Gerda.

「わたしの話はそれだけさ。」と、おにゆりはいいました。

"That is my story," said the tiger-lily.

ひるがおは、どんなお話をしたでしょう。

What, says the convolvulus?

「せまい山道のむこうに、昔のさむらいのお城がぼんやりみえます。くずれかかった、赤い石がきのうえには、つたがふかくおいしげって、ろだいのほうへ、ひと葉ひと葉、はいあがっています。ろだいの上には、うつくしいおとめが、らんかんによりかかって、おうらいをみおろしています。どんなばらの花でも、そのおとめほど、みずみずとは枝にさきだしません。どんなりんごの花でも、こんなにかるがるとしたふうに、木から風がはこんでくることはありません。まあ、おとめのうつくしい絹の着物のさらさらなること。

"Near yonder narrow road stands an old knight's castle; thick ivy creeps over the old ruined walls, leaf over leaf, even to the balcony, in which stands a beautiful maiden. She bends over the balustrades, and looks up the road. No rose on its stem is fresher than she; no apple-blossom, wafted by the wind, floats more lightly than she moves. Her rich silk rustles as she bends over and exclaims, 'Will he not come?'

あの人はまだこないのかしら。」

## 雪の女王

「あの人というのは、カイちゃんのことなの。」と、ゲルダがたずねました。

“Is it Kay you mean?” asked Gerda.

「わたしは、ただ、わたしの話をしただけ。わたしの夢をね。」と、ひるがおはこたえました。

“I am only speaking of a story of my dream,” replied the flower.

かわいい、まつゆきそうは、どんな話をしたでしょう。

What, said the little snow-drop?

「木と木のあいだに、つなでつるした長い板がさがっています。ぶらんこなの。雪のように白い着物を着て、ぼうしには、ながい、緑色の絹のリボンをまいた、ふたりのかわいらしい女の子が、それにのってゆられています。

“Between two trees a rope is hanging; there is a piece of board upon it; it is a swing. Two pretty little girls, in dresses white as snow, and with long green ribbons fluttering from their hats, are sitting upon it swinging.

## The Snow Queen

この女の子たちよりも、大きい男きょうだい、そのぶらんこに立ってのっています。男の子は、かた手にちいさなお皿をもってるし、かた手には土製のパイプをにぎっているの、からだをささえるために、つないうでをまきつけています。男の子はシャボンだまをふいているのです。ぶらんこがゆれて、シャボンだまは、いろんなくつくり色にかわりながらとんで行きます。

いちばんおしまいシャボンだまは、風にゆられながら、まだパイプのところについています。ぶらんこはとぶようにゆれています。あら、シャボンだまのように身のかるい黒犬があと足で立って、のせてもらおうとしています。ぶらんこはゆれる、黒犬はひっくりかえって、ほえているわ。からかわれて、おこっているのね。シャボンだまははじけます。――ゆれるぶらんこ。われてこわれるシャボンだま。――これがわたしの歌なんです。」

Their brother who is taller than they are, stands in the swing; he has one arm round the rope, to steady himself; in one hand he holds a little bowl, and in the other a clay pipe; he is blowing bubbles. As the swing goes on, the bubbles fly upward, reflecting the most beautiful varying colors.

The last still hangs from the bowl of the pipe, and sways in the wind. On goes the swing; and then a little black dog comes running up. He is almost as light as the bubble, and he raises himself on his hind legs, and wants to be taken into the swing; but it does not stop, and the dog falls; then he barks and gets angry. The children stoop towards him, and the bubble bursts. A swinging plank, a light sparkling foam picture,—that is my story.”

## 雪の女王

「あなたのお話は、とてもおもしろそうね。けれどあなたは、かなしそうに話しているのね。それからあなたは、カイちゃんの話は、なんにも話してくれないのね。」

ヒヤシンスの花は、どんなお話をしたでしょう。

「あるところに、三人の、すきとおるようにつくしい、きれいな姉いもうとがおりました。なかでいちばん上のむすめの着物は赤く、二ばん目のは水色で、三ばん目のはまっ白でした。きょうだいたちは、手を取りあって、さえた月の光の中で、静かな湖みずうみのふちにでて、おどりをおどります。三人とも妖女ようじょではなくて、にんげんでした。

“It may be all very pretty what you are telling me,” said little Gerda, “but you speak so mournfully, and you do not mention little Kay at all.”

What do the hyacinths say?

“There were three beautiful sisters, fair and delicate. The dress of one was red, of the second blue, and of the third pure white. Hand in hand they danced in the bright moonlight, by the calm lake; but they were human beings, not fairy elves.

## The Snow Queen

そのあたりには、なんとなく  
あまい、いいにおいがしてい  
ました。むすめたちは森のな  
かにきえました。あまい、い  
いにおいが、いっそうつよ  
くなりました。すると、その三  
人のうつくしいむすめをいれ  
た三つのひつぎが、森のしげ  
みから、すうっとあらわれて  
きて、湖のむこうへわたって  
いきました。つちぼたるが、  
そのぐるりを、空に舞まっ  
ているちいさなともしびのよ  
うに、ぴかりぴかりしてい  
ました。

おどりくるっていた三人のむ  
すめたちは、ねむったのでし  
ょうか。死んだのでしょうか。  
——花のにおいはいいま  
した。あれはなきがらです。  
ゆうべの鐘かねがなくなった  
ひとたちをとむらいます。」

The sweet fragrance attracted them, and they disappeared in the wood; here the fragrance became stronger. Three coffins, in which lay the three beautiful maidens, glided from the thickest part of the forest across the lake. The fire-flies flew lightly over them, like little floating torches.

Do the dancing maidens sleep, or are they dead?  
The scent of the flower says that they are corpses.  
The evening bell tolls their knell.”

## 雪の女王

「ずいぶんかなしいお話ね。あなたの、そのつよいにおいをかぐと、あたし死んだそのむすめさんたちのことを、おもいださずにはいられませんわ。ああ、カイちゃんは、ほんとうに死んでしまったのかしら。地のなかにはいつていたばらの花は、カイちゃんは死んではいないといってるけれど。」

“You make me quite sorrowful,” said little Gerda; “your perfume is so strong, you make me think of the dead maidens. Ah! is little Kay really dead then? The roses have been in the earth, and they say no.”

「チリン、カラン。」と、ヒヤシンスのすずがなりました。「わたしはカイちゃんのために、なっているのではありません。カイちゃんなんて人は、わたしたち、すこしもしりませんもの。わたしたちは、ただ自分のしっているたったひとつの歌を、うたっているだけです。」

“Cling, clang,” tolled the hyacinth bells. “We are not tolling for little Kay; we do not know him. We sing our song, the only one we know.”

それから、ゲルダは、緑の葉のあいだから、あかるくさいている、たんぽぽのところへいきました。

Then Gerda went to the buttercups that were glittering amongst the bright green leaves.

## The Snow Queen

「あなたはまるで、ちいさな、あかるいお日さまね。どこにわたしのおともだちがいるか、しっていたらおしえてくださいな。」と、ゲルダはいいました。

“You are little bright suns,” said Gerda; “tell me if you know where I can find my play-fellow.”

そこで、たんぽぽは、よけいあかるくひかりながら、ゲルダのほうへむきました。どんな歌を、その花がうたったでしょう。その歌も、カイのことではありませんでした。

And the buttercups sparkled gayly, and looked again at Gerda. What song could the buttercups sing? It was not about Kay.

「ちいさな、なか庭には、春のいちばんはじめの日、うらかなお日さまが、あたたかに照っていました。お日さまの光は、おとなりの家の、まっ白なかべの上から下へ、すべりおちていました。そのそばに、春いちばんはじめにさく、黄色い花が、かがやく光の中に、金のようにさいっていました。

“The bright warm sun shone on a little court, on the first warm day of spring. His bright beams rested on the white walls of the neighboring house; and close by bloomed the first yellow flower of the season, glittering like gold in the sun’s warm ray.



## 雪の女王

おばあさんは、いすをそとにだして、こしをかけていました。おばあさんの孫の、かわいそうな女中ぼうこうをしているうつくしい女の子が、おばあさんにあうために、わずかなおひまをもらって、うちへかえってきました。女の子はおばあさんにせっぷんしました。このめぐみおおいせっぷんには金きんが、こころの金きんがありました。その口にも金、そのふむ土にも金、そのあさのひとときにも金がありました。

これがわたしのつまらないお話です。」と、たんぽぽがいいました。

An old woman sat in her arm chair at the house door, and her granddaughter, a poor and pretty servant-maid came to see her for a short visit. When she kissed her grandmother there was gold everywhere: the gold of the heart in that holy kiss; it was a golden morning; there was gold in the beaming sunlight, gold in the leaves of the lowly flower, and on the lips of the maiden.

There, that is my story," said the buttercup.

## The Snow Queen

「まあ、わたしのおばあさまは、どうしていらっしゃるかしら。」と、ゲルダはためいきをつきました。「そうよ。きとおばあさまは、わたしにあいたがって、かなしがっていらっしゃるわ。カイちゃんがいなくなるとおなじように、しんぱいしていらっしゃるわ。けれど、わたし、じきにカイちゃんをつれて、うちにかえられるでしょう。——もう花たちにいくらたずねてみたってしかたがない。花たち、ただ、自分の歌をうたうだけで、なんにもこたえてくれないのだもの。」

“My poor old grandmother!” sighed Gerda; “she is longing to see me, and grieving for me as she did for little Kay; but I shall soon go home now, and take little Kay with me. It is no use asking the flowers; they know only their own songs, and can give me no information.”

## 雪の女王

そこでゲルダは、はやくかけられるように、着物をきりりとたくしあげました。けれど、黄きずいせんを、ゲルダがとびこえようとしたとき、それに足がひっかかりました。そこでゲルダはたちどまって、その黄色い、背の高い花にむかってたずねました。

「あんた、カイちゃんのこと、なんか知っているの。」

そしてゲルダは、こごんで、その花の話すことをききました。その花はなんといったでしょう。

「わたし、じぶんがみられるのよ。じぶんがわかるのよ。」と、黄きずいせんはいいました。「ああ、ああ、なんてわたしはいいにおいがするんだらう。屋根うらのちいさなへやに、半はだかの、ちいさなおどりこが立っています。おどりこはかた足で立ったり、両足で立ったりして、まるで世界中をふみつけるように見えます。でも、これはほんの目のまよいです。

And then she tucked up her little dress, that she might run faster, but the narcissus caught her by the leg as she was jumping over it; so she stopped and looked at the tall yellow flower, and said, "Perhaps you may know something." Then she stooped down quite close to the flower, and listened; and what did he say?

"I can see myself, I can see myself," said the narcissus. "Oh, how sweet is my perfume! Up in a little room with a bow window, stands a little dancing girl, half undressed; she stands sometimes on one leg, and sometimes on both, and looks as if she would tread the whole world under her feet. She is nothing but a delusion.

## The Snow Queen

おどりこは、ちいさな布ぬのに、湯わかしから湯をそそぎます。これはコルセットです。――そうです。そうです、せいけつがなによりです。白い上着うわぎも、くぎにかけてあります。それもまた、湯わかしの湯であらって、屋根でかわかしたもののなのです。

She is pouring water out of a tea-pot on a piece of stuff which she holds in her hand; it is her bodice. 'Cleanliness is a good thing,' she says. Her white dress hangs on a peg; it has also been washed in the tea-pot, and dried on the roof.

おどりこは、その上着をつけて、サフラン色のハンケチをくびにまきました。ですから、上着はよけい白くみえました。ほら、足をあげた。どう、まるでじくの上に立って、うんとふんばった姿は。わたし、じぶんが見えるの。じぶんがわかるの。』

She puts it on, and ties a saffron-colored handkerchief round her neck, which makes the dress look whiter. See how she stretches out her legs, as if she were showing off on a stem. I can see myself, I can see myself."

「なにもそんな話、わたしにしなくてもいいじゃないの。そんなこと、どうだって、かまわないわ。」と、ゲルダはいいました。

"What do I care for all that," said Gerda, "you need not tell me such stuff." And then she ran to the other end of the garden.

それでゲルダは、庭のむこうのはしまでかけて行きました。

## 雪の女王

その戸はしまっていました  
が、ゲルダがそのさびついた  
とつてを、どんとおしたの  
で、はずれて戸はぱんとひら  
きました。ゲルダはひろい世  
界に、はだしのままでとびだ  
しました。

The door was fastened, but she pressed against the rusty latch, and it gave way. The door sprang open, and little Gerda ran out with bare feet into the wide world.

ゲルダは、三度どもあとをふ  
りかえってみましたが、たれ  
もおっかけてくるものはあり  
ませんでした。とうとうゲル  
ダは、もうとてもはしること  
ができなくなったので、大き  
な石の上にこしをおろしまし  
た。そこらを見まわします  
と、夏はすぎて、秋がふか  
なっていました。お日さまが  
年中かがやいて、四季しきの  
花がたえずさいていた、あの  
うつくしい花ぞのでは、そん  
なことはわかりませんでした。

She looked back three times, but no one seemed to be following her. At last she could run no longer, so she sat down to rest on a great stone, and when she looked round she saw that the summer was over, and autumn very far advanced. She had known nothing of this in the beautiful garden, where the sun shone and the flowers grew all the year round.

「ああ、どうでしょう。あ  
たし、こんなにおくれてしま  
って。」と、ゲルダはいいま  
した。「もうとうに秋になっ  
ているのね。さあ、ゆっくり  
してはられないわ。」

“Oh, how I have wasted my time?” said little Gerda; “it is autumn. I must not rest any longer,” and she rose up to go on.

## The Snow Queen

そしてゲルダは立ちあがって、ずんずんあるきだしました。まあ、ゲルダのかよわい足は、どんなにいたむし、そして、つかれていたことでしょう。どこも冬がれて、わびしいけしきでした。ながいやなぎの葉は、すっかり黄ばんで、きりが雨しずくのように枝からたれていました。ただ、とげのある、こけももだけは、まだ実みをむすんでいましたが、こけももはすっぱくて、くちがまがるようでした。

ああ、なんてこのひろびろした世界は灰色で、うすぐらくみえたことでしょう。

But her little feet were wounded and sore, and everything around her looked so cold and bleak. The long willow-leaves were quite yellow. The dew-drops fell like water, leaf after leaf dropped from the trees, the sloe-thorn alone still bore fruit, but the sloes were sour, and set the teeth on edge.

Oh, how dark and weary the whole world appeared!

## 雪の女王

## 第四のお話。王子と王女

ゲルダは、またも、やすまなければなりません。ゲルダがやすんでいた場所の、ちょうどむこうの雪の上で、一わの大きなからすが、ぴょんぴょんやっていました。このからすは、しばらくじっとしたなりゲルダをみつめて、あたまをふっていました。やがてこういいました。「カア、カア、こんちは。こんちは。」

からすは、これよりよくは、なにもいうことができませんでしたが、でも、ゲルダをなつかしくおもっていて、このひろい世界で、たったひとりぼっち、どこへいくのだといって、たずねました。

## Fourth Story: The Prince and Princess

“Gerda was obliged to rest again, and just opposite the place where she sat, she saw a great crow come hopping across the snow toward her. He stood looking at her for some time, and then he wagged his head and said, “Caw, caw; good-day, good-day.”

He pronounced the words as plainly as he could, because he meant to be kind to the little girl; and then he asked her where she was going all alone in the wide world.

## The Snow Queen

この「ひとりぼっち。」ということばを、ゲルダはよくあじわって、しみじみそのことばに、ふかいいみのこもっていることをおもいました。ゲルダはそこからさらに、じぶんの身の上のことをすっかり話してきかせた上、どうかしてカイをみなかったか、たずねました。

The word alone Gerda understood very well, and knew how much it expressed. So then she told the crow the whole story of her life and adventures, and asked him if he had seen little Kay.

するとからは、ひどくまじめにかんがえこんで、こういいました。  
「あれかもしれない。あれかもしれない。」

The crow nodded his head very gravely, and said, "Perhaps I have—it may be."

「え、してて。」と、ゲルダは大きなこえでいって、からはをらんぼうに、それこそいきのとまるほどせっぷんしました。

"No! Do you think you have?" cried little Gerda, and she kissed the crow, and hugged him almost to death with joy.

「おてやわらかに、おてやわらかに。」と、からはいいました。「どうも、カイちゃんを失っているような気がします。たぶん、あれがカイちゃんだろうとおもいますよ。けれど、カイちゃんは、王女さまのところにて、あなたのことなどは、きっとわすれていますよ。」

"Gently, gently," said the crow. "I believe I know. I think it may be little Kay; but he has certainly forgotten you by this time for the princess."



## 雪の女王

「カイちゃんは、王女さまの  
ところにいるんですって。」  
と、ゲルダはききました。

“Does he live with a princess?” asked Gerda.

「そうです。まあ、おききな  
さい。」と、からすはいいま  
した。「どうも、わたしにす  
ると、にんげんのことばで話  
すのは、たいそうなほねおり  
です。あなたにからすのこと  
ばがわかると、ずっとうまく  
話せるのだからなあ。」

“Yes, listen,” replied the crow, “but it is so difficult to speak your language. If you understand the crows’ language<sup>1</sup> then I can explain it better. Do you?”

「まあ、あたし、ならったこ  
とがなかったわ。」と、ゲル  
ダはいいました。「でも、う  
ちのおばあさまは、おできに  
なるのよ。あたし、ならって  
おけばよかった。」

“No, I have never learnt it,” said Gerda, “but my grandmother understands it, and used to speak it to me. I wish I had learnt it.”

「かまいませんよ。」と、か  
らすはいいました。「まあ、  
できるだけしてみますから。  
うまくいけばいいが。」  
それからからすは、しってい  
ることを、話しました。

“It does not matter,” answered the crow; “I will explain as well as I can, although it will be very badly done;” and he told her what he had heard.

## The Snow Queen

「わたしたちがいまいる国には、たいそうかしこい王女さまがおいでなのです。なにしろ世界中のしんぶんをのこらず読んで、のこらずまたわすれてしまいます。まあそんなわけで、たいそうりこうなかたなのです。

"In this kingdom where we now are," said he, "there lives a princess, who is so wonderfully clever that she has read all the newspapers in the world, and forgotten them too, although she is so clever.

さて、このあいだ、王女さまは玉座ぎょくざにおすわりになりました。玉座というものは、せけんでいうほどたのしいものではありません。そこで王女さまは、くちずさみに歌をうたいました。その歌は『なぜに、わたしは、むことらぬ』といった歌でした。

A short time ago, as she was sitting on her throne, which people say is not such an agreeable seat as is often supposed, she began to sing a song which commences in these words:

'Why should I not be married?'

そこで、『なるほど、それをもっともだわ。』と、いうわけで、王女さまはけっこんしようとおもいました。でも夫おっとにするなら、ものをたずねても、すぐとこたえるようなのがほしいとおもいました。だって、ただそこにつっ立って、ようすぶっているだけでは、じきにたいくつしてしまいますからね。

'Why not indeed?' said she, and so she determined to marry if she could find a husband who knew what to say when he was spoken to, and not one who could only look grand, for that was so tiresome.

## 雪の女王

そこで、王女さまは、女官じよかんたち、のこらずおめしになって、このもくろみをお話しになりました。女官たちは、たいそうおもしろくおもいまして、

『それはよいおもいつきでございます。わたくしどもも、ついさきごろ、それとおなじことをかんがえついたので。』などと申しました。

「わたしのいっていることは、ごく、ほんとうのことなのですよ。」と、からすは言って、「わたしには、やさしいいなずけがあって、その王女さまのお城に、自由にとんでいける、それがわたしにすっかり話してくれたのです。」と、いいそえました。

いうまでもなく、その、いいいなずけというのはからすでした。というのは、にたものどうしで、からすはやはり、からすなかまであつまります。

Then she assembled all her court ladies together at the beat of the drum, and when they heard of her intentions they were very much pleased. 'We are so glad to hear it,' said they, 'we were talking about it ourselves the other day.' You may believe that every word I tell you is true," said the crow, "for I have a tame sweetheart who goes freely about the palace, and she told me all this."

Of course his sweetheart was a crow, for "birds of a feather flock together," and one crow always chooses another crow.

## The Snow Queen

ハートと、王女さまのかしらもじでふちどったしんぶんが、さっそく、はっこうされました。それには、ようすのりっぱな、わかい男は、たれでもお城にきて、王女さまと話すことができる。そしてお城へきても、じぶんのうちにいるように、気やすく、じょうずに話した人を、王女は夫としてえらぶであろうということがかいてありました。

「そうです。そうです。あなたはわたしをだいじょうぶ信じてください。この話は、わたしがここにこうしてすわっているのとどうよう、ほんとうの話なのですから。」と、からすはいいました。

「わかい男の人たちは、むれをつくって、やってきました。そしてたいそう町はこんごつして、たくさんの人が、あっちへいたり、こっちへきたり、いそがしそうにかけずりまわっていました。でもはじめの日も、つぎの日も、ひとりだっとうまくやったものはありません。

“Newspapers were published immediately, with a border of hearts, and the initials of the princess among them. They gave notice that every young man who was handsome was free to visit the castle and speak with the princess; and those who could reply loud enough to be heard when spoken to, were to make themselves quite at home at the palace; but the one who spoke best would be chosen as a husband for the princess.

Yes, yes, you may believe me, it is all as true as I sit here,” said the crow. “The people came in crowds. There was a great deal of crushing and running about, but no one succeeded either on the first or second day.

## 雪の女王

みんなは、お城のそとでこそ、よくしゃべりましたが、いちどお城の門をはいって、銀づくめのへいたいをみたり、かいだんをのぼって、金ぴかのせいふくをつけたお役人に出あって、あかるい大広間にはいると、とたんにぼうっとなってしまう。そして、いよいよ王女さまのおいでになる玉座の前に出たときには、たれも王女さまにいわれたことばのしりを、おうむがえしにくりかえすほかありませんでした。王女さまとすれば、なにもじぶんのいったことばを、もういちどいってもらってもしかたがないでしょう。

ところが、だれも、ごてんの中にはいると、かぎたばこでものまされたように、ふらふらで、おうらいへでてきて、やっとわれにかえって、くちがきけるようになる。

They could all speak very well while they were outside in the streets, but when they entered the palace gates, and saw the guards in silver uniforms, and the footmen in their golden livery on the staircase, and the great halls lighted up, they became quite confused. And when they stood before the throne on which the princess sat, they could do nothing but repeat the last words she had said; and she had no particular wish to hear her own words over again.

It was just as if they had all taken something to make them sleepy while they were in the palace, for they did not recover themselves nor speak till they got back again into the street.

## The Snow Queen

なにしろ町の門から、お城の門まで、わかいひとたちが、れつをつくってならんでいました。わたしはそれをじぶんで見てきましたよ。」と、かからすが、ねんをおしていいました。「みんなは自分のばんが、なかなかまわってこないの、おなかがすいたり、のどがかわいたりしましたが、ごてんの中では、なまぬるい水いっぱいくれませんでした。

There was quite a long line of them reaching from the town-gate to the palace. I went myself to see them," said the crow. "They were hungry and thirsty, for at the palace they did not get even a glass of water.

なかで気のきいたせんせいたちが、バタパンご持参で、やってきていましたが、それをそばの人にわけようとはしませんでした。このれんじゅうの気では——こいつら、たんとひもじそうな顔をしているがいい。おかげで王女さまも、ごさいようになるまいから——というのでしょうか。」

Some of the wisest had taken a few slices of bread and butter with them, but they did not share it with their neighbors; they thought if they went in to the princess looking hungry, there would be a better chance for themselves."

「でも、カイちゃんはどうしたのです。いつカイちゃんはやってきたのです。」と、ゲルダはたずねました。「カイちゃんは、その人たちのなかまにいたのですか。」

"But Kay! tell me about little Kay!" said Gerda, "was he amongst the crowd?"

## 雪の女王

「まあまあ、おまちなさい。これから、そろそろ、カイちゃんのことになるのです。ところで、その三日目に、馬にも、馬車にもものらないちいさな男の子が、たのしそうにお城のほうへ、あるいていきました。その人の目は、あなたの目のようにかがやいて、りっぱな、長いかみの毛をもっていました。着物はぼろぼろにきれってました。」

“Stop a bit, we are just coming to him. It was on the third day, there came marching cheerfully along to the palace a little personage, without horses or carriage, his eyes sparkling like yours; he had beautiful long hair, but his clothes were very poor.”

「それがカイちゃんなのね。ああ、それでは、とうとう、あたし、カイちゃんをみつけたわ。」と、ゲルダはうれしそうにさげんで、手をたたきました。

“That was Kay!” said Gerda joyfully. “Oh, then I have found him;” and she clapped her hands.

「その子は、せなかに、ちいさなはいのうをしょっていました。」と、からすがいいました。

“He had a little knapsack on his back,” added the crow.

「いいえ、きっと、それは、そりよ。」と、ゲルダはいいました。「カイちゃんは、そりといっしょに見えなくなってしまったのですもの。」

“No, it must have been his sledge,” said Gerda; “for he went away with it.”

## The Snow Queen

「なるほど、そうかもしれませんが。」と、からすはいいました。「なにしろ、ちょっと見ただけですから。しかし、それは、みんなわたしのやさしいいなすけからきいたのです。それから、その子はお城の門をはいって、銀の軍服ぐんぷくのへいたいをみながら、だんをのぼって、金ぴかのせいふくのお役人の前にでましたが、すこしもまごつきませんでした。それどころか、へいきでえしゃくして、

『かいだんの上に立っているのは、さぞたいくつでしょうね。ではごめんこうむって、わたしは広間にはいらせてもらいましょう。』

"It may have been so," said the crow; "I did not look at it very closely. But I know from my tame sweetheart that he passed through the palace gates, saw the guards in their silver uniform, and the servants in their liveries of gold on the stairs, but he was not in the least embarrassed.

'It must be very tiresome to stand on the stairs,' he said. 'I prefer to go in.'



## 雪の女王

と、いいました。広間にはあかりがいっぱいついて、枢密顧問官すうみつこもんかんや、身分の高い人たちが、はだしで金の器うつわをはこんであるいていました。そんな中で、たれだって、いやでもおごそかなきもちになるでしょう。ところへ、その子のながぐつは、やけにやかましくギュウ、ギュウなるのですが、いっこうにへいきでした。」

「きっとカイちゃんよ。」と、ゲルダがさけびました。「だって、あたらしい長ぐつをはいていましたもの。わたし、そのくつがギュウ、ギュウいうのを、おばあさまのへやできいたわ。」

The rooms were blazing with light. Councillors and ambassadors walked about with bare feet, carrying golden vessels; it was enough to make any one feel serious. His boots creaked loudly as he walked, and yet he was not at all uneasy.”

“It must be Kay,” said Gerda, “I know he had new boots on, I have heard them creak in grandmother’s room.”

## The Snow Queen

「そう、ほんとうにギユウ、ギユウってなりましたよ。」と、からすはまた話しはじめました。「さて、その子は、つかつかと、糸車ほどの大きなしんじゅに、こしをかけている、王女さまのご前ぜんに進みました。王女さまのぐるりをとりまいて、女官たちがおつきを、そのおつきがまたおつきを、したがえ、侍従じじゅうがけらいの、またそのけらいをしたがえ、それがまた、めいめい小姓こしょうをひきつれて立っていました。しかも、とびらの近くに立っているものほど、いばっているように見えました。

しじゅう、うわぐつであるきまわっていた、けらいのけらいの小姓なんか、とてもあおむいて顔が見られないくらいでした。とにかく、戸ぐちのところでは、いばりかえっているふうは、ちょっと見ものでした。」

“They really did creak,” said the crow, “yet he went boldly up to the princess herself, who was sitting on a pearl as large as a spinning wheel, and all the ladies of the court were present with their maids, and all the cavaliers with their servants; and each of the maids had another maid to wait upon her, and the cavaliers’ servants had their own servants, as well as a page each. They all stood in circles round the princess, and the nearer they stood to the door, the prouder they looked.

The servants’ pages, who always wore slippers, could hardly be looked at, they held themselves up so proudly by the door.”

## 雪の女王

「まあ、ずいぶんこわいこと。それでもカイちゃんは、王女さまとけっこんしたのですか。」と、ゲルダはいいました。

“It must be quite awful,” said little Gerda, “but did Kay win the princess?”

「もし、わたしがからすでなかったなら、いまのいいなずけをすてても、王女さまとけっこんしたかもしれせん。人のうわさによりますと、その人は、わたしがからすのことばを話すときとどうよう、じょうずに話したということでした。わたしは、そのことを、わたしのいいなずけからきいたのです。

“If I had not been a crow,” said he, “I would have married her myself, although I am engaged. He spoke just as well as I do, when I speak the crows’ language, so I heard from my tame sweetheart.

どうして、なかなかようすのいい、げんきな子でした。それも王女さまとけっこんするためきたのではなくて、ただ、王女さまがどのくらいかしこいか知ろうとおもってやってきたのですが、それで王女さまがすきになり、王女さまもまたその子がすきになったというわけです。」

He was quite free and agreeable and said he had not come to woo the princess, but to hear her wisdom; and he was as pleased with her as she was with him.”

## The Snow Queen

「そう、いよいよ、そのひと、カイちゃんにちがいないわ。カイちゃんは、そりゃりこうで、分数まであんざんでやれますもの——ああ、わたしを、そのお城へつれていってくださいらないこと。」と、ゲルダはいいました。

“Oh, certainly that was Kay,” said Gerda, “he was so clever; he could work mental arithmetic and fractions. Oh, will you take me to the palace?”

「さあ、くちでいうのはたやすいが、どうしたら、それができるか、むずかしいですよ。」と、からすはいいました。「ところで、まあ、それをどうするか、まあ、わたしのいいなずけにそうだんしてみましよう。きっと、いいちえをかしてくれるかもしれませぬ。なにしろ、あなたのような、ちいさな娘さんが、お城の中にはいることは、ゆるされていないのですからね。」

“It is very easy to ask that,” replied the crow, “but how are we to manage it? However, I will speak about it to my tame sweetheart, and ask her advice; for I must tell you it will be very difficult to gain permission for a little girl like you to enter the palace.”

「いいえ、そのおゆるしならもらえてよ。」と、ゲルダがこたえました。「カイちゃんは、わたしがきたときけば、すぐに出てきて、わたしをいれてくれるでしょう。」

“Oh, yes; but I shall gain permission easily,” said Gerda, “for when Kay hears that I am here, he will come out and fetch me in immediately.”

## 雪の女王

「むこうのかきねのところで、まっていらっしゃい。」と、からすはいって、あたまをふりふりとんでいってしまいました。

“Wait for me here by the palings,” said the crow, wagging his head as he flew away.

そのからすがかえってきたときには、晩もだいぶくらくなっていました。

It was late in the evening before the crow returned. “Caw, caw,” he said, “she sends you greeting, and here is a little roll which she took from the kitchen for you; there is plenty of bread there, and she thinks you must be hungry.”

「すてき、すてき。」と、からすはいいました。「いいなずけが、あなたによろしくとのことでしたよ。さあ、ここに、すこしばかりパンをもってきてあげました。さぞ、おなかがすいたでしょう。いいなずけが、だいどころからもってきたのです。そこにはたくさんまだあるのです。」

## The Snow Queen

—「どうも、お城へはいることは、できそうもありませんよ。なぜとって、あなたはくつをはいていませんから、銀の軍服のへいたいや、金ぴかのせいふくのお役人たちが、ゆるしてくれないでしょうからね、だがそれで泣いてはいけません。きっと、つれて行けるくふうはしますよ。わたしのいいなずけは、王女さまのねまに通じている、ほそい、うらばしごをしっていますし、そのかぎのあるところもしっているのですからね。」

そこで、からすとゲルダとは、お庭をぬけて、木の葉があとからあとからと、ちってくる並木道なみきみちを通りました。そして、お城のあかりが、じゅんじゅんにきえてしまったとき、からすはすこしあいているうらの戸口へ、ゲルダをつれていきました。

It is not possible for you to enter the palace by the front entrance. The guards in silver uniform and the servants in gold livery would not allow it. But do not cry, we will manage to get you in; my sweetheart knows a little back-staircase that leads to the sleeping apartments, and she knows where to find the key."

Then they went into the garden through the great avenue, where the leaves were falling one after another, and they could see the light in the palace being put out in the same manner. And the crow led little Gerda to the back door, which stood ajar.

## 雪の女王

まあ、ゲルダのむねは、こわかったり、うれしかったりで、なんてどきどきしたことでしょう。まるでゲルダは、なにかわるいことでもしているような気がしました。けれど、ゲルダはその人が、カイちゃんであるかどうかをしりたい、いっしんなのです。

Oh! how little Gerda's heart beat with anxiety and longing; it was just as if she were going to do something wrong, and yet she only wanted to know where little Kay was.

そうです。それはきっと、カイちゃんにちがいありません。ゲルダは、しみじみとカイちゃんのりこうそうな目つきや、長いかみの毛をおもいだしていました。そして、ふたりがうちにいて、ばらの花のあいだにすわってあそんだとき、カイちゃんがわらったとおりの笑顔えがおが、目にうかびました。

"It must be he," she thought, "with those clear eyes, and that long hair." She could fancy she saw him smiling at her, as he used to at home, when they sat among the roses.

そこで、カイちゃんにあって、ながいながい道中をして自分をさがしにやってきたことをきき、あれなりかえらないので、どんなにみんなが、かなしんでいるかしたのなら、こうしてきてくれたことを、どんなによろこぶでしょう。

He would certainly be glad to see her, and to hear what a long distance she had come for his sake, and to know how sorry they had been at home because he did not come back.

## The Snow Queen

まあ、そうおもうと、うれしいし、しんぱいでした。

Oh what joy and yet fear she felt!

さて、からすとゲルダとは、かいだんの上ののぼりました。ちいさなランプが、たなの上についていました。そして、ゆか板のまん中のところには、飼いならされた女がらすが、じっとゲルダを見て立っていました。ゲルダはおばあさまからおそわったように、ていねいにおじぎしました。

They were now on the stairs, and in a small closet at the top a lamp was burning. In the middle of the floor stood the tame crow, turning her head from side to side, and gazing at Gerda, who curtsied as her grandmother had taught her to do.

「かわいいおじょうさん。わたしのいいなずけは、あなたのことを、たいそうほめておりました。」と、そのやさしいからすがいいました。「あなたの、そのごけいれきとやらもうしますのは、ずいぶんおきのどくなのですね。さあ、ランプをおもちください。ごあんないしますわ。このところをまっすぐにまいりましょう。もうだれにもあいませんから。」

“My betrothed has spoken so very highly of you, my little lady,” said the tame crow, “your life-history, Vita, as it may be called, is very touching. If you will take the lamp I will walk before you. We will go straight along this way, then we shall meet no one.”



## 雪の女王

「だれか、わたしたちのあとから、ついてくるような気がすることね。」と、なにかがそばをきゅうに通ったときに、ゲルダはいいました。それは、たてがみをふりみだして、ほっそりとした足をもっている馬だの、それから、かりうどだの、馬にのったりっぱな男の人や、女の人だの、それがみんなかべにうつったかげのように見えました。

「あれは、ほんの夢なのですよ。」と、からすがいいました。「あれらは、それぞれのご主人たちのところを、りょうにさそいだそうとしてくるのです。つごうのいいことに、あなたは、ねどこの中であのひとたちのお休みのところがよくみられます。そこで、どうか、あなたがりっぱな身分におなりになったのちも、せわになったおれいは、おわすれなくね。」

「それはいうまでもないことだろうよ。」と、森のからすがいいました。

"It seems to me as if somebody were behind us," said Gerda, as something rushed by her like a shadow on the wall, and then horses with flying manes and thin legs, hunters, ladies and gentlemen on horseback, glided by her, like shadows on the wall.

"They are only dreams," said the crow, "they are coming to fetch the thoughts of the great people out hunting." "All the better, for we shall be able to look at them in their beds more safely. I hope that when you rise to honor and favor, you will show a grateful heart."

"You may be quite sure of that," said the crow from the forest.

## The Snow Queen

さて、からすとゲルダとは、一ばんはじめの広間にはいっていきました。そこのかべには、花でかざった、ばら色のしゅすが、上から下まで、はりつめられていました。そして、ここにもりょうにさそうさっきの夢は、もうとんで来ていましたが、あまりはやくうごきすぎて、ゲルダはえらい殿とのさまや貴婦人きふじん方を、こんどはみる事ができませんでした。

They now came into the first hall, the walls of which were hung with rose-colored satin, embroidered with artificial flowers. Here the dreams again flitted by them but so quickly that Gerda could not distinguish the royal persons.

ひろまから、ひろまへ行くほど、みどとにできていました。ただもうあまりのうつくしさに、まごつくばかりでしたが、そのうち、とうとうねままではいっていきました。

Each hall appeared more splendid than the last, it was enough to bewilder any one. At length they reached a bedroom.

そこのてんじょうは、高価なガラスの葉をひろげた、大きなしゅろの木のかたちになっていました。そして、へやのまんなかには、ふたつのベッドが、木のじくにあたる金のふとい柱につりさがっていて、ふたつとも、ゆりの花のようにみえました。

The ceiling was like a great palm-tree, with glass leaves of the most costly crystal, and over the centre of the floor two beds, each resembling a lily, hung from a stem of gold.

## 雪の女王

そのベッドはひとつは白くて、それには王女がねむっていました。もうひとつのは赤くて、そこにねむっている人こそ、ゲルダのさがすカイちゃんではなくてはならないのです。ゲルダは赤い花びらをひとつひら、そっとどけると、そこに日やけしたくびすじが見えました。——ああ、それはカイちゃんでした。

——ゲルダは、カイちゃんの名をこえ高くよびました。ランプをカイちゃんのほうへさしだしました。……夢がまた馬にのって、さわがしくそのへやの中へ、はいつてきました。……その人は目をさまして、顔をこちらにむけました。ところが、それはカイちゃんではなかったのです。

One, in which the princess lay, was white, the other was red; and in this Gerda had to seek for little Kay. She pushed one of the red leaves aside, and saw a little brown neck. Oh, that must be Kay!

She called his name out quite loud, and held the lamp over him. The dreams rushed back into the room on horseback. He woke, and turned his head round, it was not little Kay!

## The Snow Queen

いまは王子となったその人は、ただ、くびすじのところが、カイちゃんににていただけでした。でもその王子はわかくて、うつくしい顔をしていました。王女は白いゆりの花ともみえるベッドから、目をぱちくりやってみあげながら、たれがそこにきたのかと、おたずねになりました。そこでゲルダは泣いて、いままでのことや、からすがいろいろにつくしてくれたことなどを、のこらず王子に話しました。

「それは、まあ、かわいそうに。」と、王子と王女とがいいました。そして、からすをおほめになり、じぶんたちはけっして、からすがしたことをおこりはしないが、二どとこんなことをしてくれるな、とおっしゃいました。それでも、からすたちは、ごほうびをいただくことになりました。

The prince was only like him in the neck, still he was young and pretty. Then the princess peeped out of her white-lily bed, and asked what was the matter. Then little Gerda wept and told her story, and all that the crows had done to help her.

“You poor child,” said the prince and princess; then they praised the crows, and said they were not angry for what they had done, but that it must not happen again, and this time they should be rewarded.

## 雪の女王

「おまえたちは、すきかってに、そとをとびまわっているほうがいいかい。」と、王女はたずねました。「それとも、宮中おほかえのからすとして、台所のおあまりは、なんでもたべることができるし、そういうふうにして、いつまでもごてんにいたいとおもうかい。」

“Would you like to have your freedom?” asked the princess, “or would you prefer to be raised to the position of court crows, with all that is left in the kitchen for yourselves?”

そこで、二わのからすはおじぎをして、自分たちが、としをとってからのことをかんがえると、やはりごてんにおいていただきたいと、ねがいました。そして、  
「だれしもいっていますように、さきへ行ってこまらないように、したいものでございます。」と、いいました。

Then both the crows bowed, and begged to have a fixed appointment, for they thought of their old age, and said it would be so comfortable to feel that they had provision for their old days, as they called it.

王子はそのとき、ベッドから出て、ゲルダをそれにねかせ、じぶんは、それなりねようとはしませんでした。

And then the prince got out of his bed, and gave it up to Gerda,—he could do no more; and she lay down.

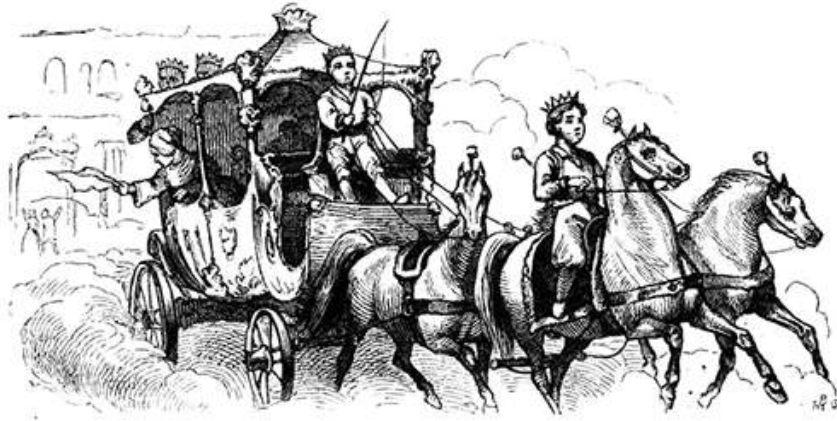
ゲルダはちいさな手をくんで、「まあ、なんといういい人や、いいからすたちだろう。」と、おもいました。それから、目をつぶって、すやすやねむりました。

She folded her little hands, and thought, “How good everyone is to me, men and animals too;” then she closed her eyes and fell into a sweet sleep.

## The Snow Queen

すると、また夢がやってきて、こんどは天使のような人たちが、一だいのそりをひいてきました。その上には、カイちゃんが手まねきしていました。けれども、それはただの夢だったので、目をさますと、さっそくきえてしまいました。

All the dreams came flying back again to her, and they looked like angels, and one of them drew a little sledge, on which sat Kay, and nodded to her. But all this was only a dream, and vanished as soon as she awoke.



## 雪の女王

あくる日になると、ゲルダはあたまから、足のさきまで、絹やびろうどの着物でつつまれました。そしてこのままお城にとどまっていて、たのしくくらすようにとすすめられました。でも、ゲルダはただ、ちいさな馬車と、それをひくうまと、ちいさな一そくの長ぐつがいただきとうございませと、いいました。それでもういちど、ひろい世界へ、カイちゃんをさがしに出ていきたいのです。

さて、ゲルダは長ぐつばかりでなく、マッフまでもらって、さっぱりと旅のしたくができました。いよいよでかけようというときに、げんかんには、じゅん金のあたらしい馬車が一だいとまりました。王子と王女の紋章もんしょうが、星のようにひかっついていました。ぎよしゃや、べっとうや、おさきばらいが――そうです、おさきばらいまでが――金の冠かんむりをかぶってならんでいました。

The following day she was dressed from head to foot in silk and velvet, and they invited her to stay at the palace for a few days, and enjoy herself, but she only begged for a pair of boots, and a little carriage, and a horse to draw it, so that she might go into the wide world to seek for Kay.

And she obtained, not only boots, but also a muff, and she was neatly dressed; and when she was ready to go, there, at the door, she found a coach made of pure gold, with the coat-of-arms of the prince and princess shining upon it like a star, and the coachman, footman, and outriders all wearing golden crowns on their heads.

## The Snow Queen

王子と王女は、ごじぶんで、ゲルダをたすけて馬車にのらせ、ぶじにいてくるようにおっしゃいました。

The prince and princess themselves helped her into the coach, and wished her success.

もういまはけっこんをすませた森のからすも、三マイルさきまで、みおくりにつきてきました。このからすは、うしろむきにのってられないといので、ゲルダのそばにすわっていました。めすのほうのからすは、羽根をばたばたやりながら、門のところにとまっていました。おくっていかないわけは、あれからずっとごてんづとめで、たくさんにたべものをいただくせいか、ひどく頭痛ずつうがしていたからです。

The forest crow, who was now married, accompanied her for the first three miles; he sat by Gerda's side, as he could not bear riding backwards. The tame crow stood in the door-way flapping her wings. She could not go with them, because she had been suffering from headache ever since the new appointment, no doubt from eating too much.

その馬車のうちがわは、さとうビスケットでできていて、こしをかけるところは、くだものや、くるみのはいったしょうがパンでできていました。

The coach was well stored with sweet cakes, and under the seat were fruit and gingerbread nuts.



## 雪の女王

「さよなら、さよなら。」と、王子と王女がさけびました。するとゲルダは泣きだしました。――からすもまた泣きました。――さて、馬車が三マイル先のところまできたとき、こんどはからすが、さよならをいいました。この上ないかなしいわかれでした。

“Farewell, farewell,” cried the prince and princess, and little Gerda wept, and the crow wept; and then, after a few miles, the crow also said “Farewell,” and this was the saddest parting.

からすはそこの木の上にとびあがって、馬車がいよいよ見えなくなるまで、黒いつばさを、ばたばたやっていました。馬車はお日さまのようにかがやきながら、どこまでもはしりつづけました。

However, he flew to a tree, and stood flapping his black wings as long as he could see the coach, which glittered in the bright sunshine.

### 第五のお話。おいはぎのこむすめ

### Fifth Story: Little Robber-Girl

それから、ゲルダのなかまは、くらい森の中を歩いていきました。ところが、馬車の光は、たいまつのようにちらちらしていました。

The coach drove on through a thick forest, where it lighted up the way like a torch, and dazzled the eyes of some robbers, who could not bear to let it pass them unmolested.

## The Snow Queen

それが、おいはぎどもの目にとまって、がまんがなくなさせました。

「やあ、金きんだぞ、金だぞ。」と、おいはぎたちはさげんで、いちどにとびだしてきました。馬をおさえて、ぎょしゃ、べっとうから、おさきばらいまでころして、ゲルダを馬車からひきずりおろしました。

「こりゃあ、たいそうふとって、かわいらしいむすめだわい。きっと、年中くるみの実みばかりたべていたのだろう。」と、おいはぎばばがいいました。女のくせに、ながい、こわいひげをはやして、まゆげが、目の上までたれさがったばあさんでした。

「なにしろそっくり、あぶらののった、こひつじというところだが、さあたべたら、どんな味がするかな。」  
 そうって、ばあさんは、ぴかぴかするナイフをもちだしました。きれそうにひかって、きみのわるいといったらありません。

“It is gold! it is gold!” cried they, rushing forward, and seizing the horses. Then they struck the little jockeys, the coachman, and the footman dead, and pulled little Gerda out of the carriage.

“She is fat and pretty, and she has been fed with the kernels of nuts,” said the old robber-woman, who had a long beard and eyebrows that hung over her eyes.

“She is as good as a little lamb; how nice she will taste!” and as she said this, she drew forth a shining knife, that glittered horribly.

## 雪の女王

「あッ。」そのとたん、ばあさんはこえをあげました。その女のせなかにぶらさがっていた、こむすめが、なにしろらんぼうなだだっ子で、おもしろがって、いきなり、母親の耳をかんだのです。

「このあまあ、なによをする。」と、母親はさげびました。おかげで、ゲルダをころす、はなさきをおられました。

「あの子は、あたいといっしょにあそぶのだよ。」と、おいはぎのこむすめは、いいました。

「あの子はマッフや、きれいな着物をあたいにくれて、晩にはいっしょにねるのだよ。」

こういって、その女の子は、もういちど、母親の耳をしたたかにかみしました。それで、ばあさんはとびあがって、ぐるぐるまわりしました。おいはぎどもは、みんなわらって、

「見ろ、ばばあが、がきといっしょにおどっているからよ。」と、いいました。

“Oh!” screamed the old woman the same moment; for her own daughter, who held her back, had bitten her in the ear. She was a wild and naughty girl, and the mother called her an ugly thing, and had not time to kill Gerda.

“She shall play with me,” said the little robber-girl; “she shall give me her muff and her pretty dress, and sleep with me in my bed.” And then she bit her mother again, and made her spring in the air, and jump about; and all the robbers laughed, and said, “See how she is dancing with her young cub.”

## The Snow Queen

「馬車の中へはいってみようや。」と、おいはぎのこむすめはいいました。このむすめは、わんぱくにそだって、おまけにごうじょうっぱりでしたから、なんでもしたいとおもうことをしなければ、気がすみませんでした。

“I will have a ride in the coach,” said the little robber-girl; and she would have her own way; for she was so self-willed and obstinate.

それで、ゲルダとふたり馬車にのりこんで、きりかぶや、石のでている上を~~通~~って、林のおくへ、ふかくは~~い~~っていききました。おいはぎのこむすめは、ちょうどゲルダぐらいの大きさでしたが、ずっと、きつそうで、肩つきががっしりしていました。どす黒ぐろいはだをして、その目はまっ黒で、なんだかかなしそうに見えました。女の子は、ゲルダのこしのまわりに手をかけて、

She and Gerda seated themselves in the coach, and drove away, over stumps and stones, into the depths of the forest. The little robber-girl was about the same size as Gerda, but stronger; she had broader shoulders and a darker skin; her eyes were quite black, and she had a mournful look. She clasped little Gerda round the waist, and said,—

「あたい、おまえとけんかしないうちは、あんなやつらに、おまえをころさせやしないことよ。おまえはどこかの王女じゃなくて。」と、いいました。

“They shall not kill you as long as you don’t make us vexed with you. I suppose you are a princess.”

## 雪の女王

「いいえ、わたしは王女ではありません。」と、ゲルダはこたえて、いままでにあったできごとや、じぶんがどんなに、すきなカイちゃんのことを思っているか、ということなぞを話しました。

“No,” said Gerda; and then she told her all her history, and how fond she was of little Kay.

おいはぎのむすめは、しげしげとゲルダを見て、かるくなずきながら、  
「あたいは、おまえとけんかしたって、あのやつらに、おまえをころさせやしないよ。そんなくらいなら、あたいは、じぶんでおまえをころしてしまうわ。」と、いいました。  
それからむすめは、ゲルダの目をふいてやり、両手をうつくしいマッフにつけてみましたが、それはたいへん、ふっくりして、やわらかでした。

The robber-girl looked earnestly at her, nodded her head slightly, and said, “They sha’nt kill you, even if I do get angry with you; for I will do it myself.” And then she wiped Gerda’s eyes, and stuck her own hands in the beautiful muff which was so soft and warm.

## The Snow Queen

さあ、馬車はとまりました。  
そこはおいはぎのこもる、お  
城のひろ庭でした。その山塞  
さんさいは、上から下までひ  
びだらけでした。そのずれた  
われ目から、大がらす小がら  
すがとびまわっていました。  
大きなブルドッグが、あいて  
かまわず、にんげんでもくっ  
てしまいそうなようすで、高  
くとびあがりました。でも、  
けっしてほえませんでした。  
ほえることはとめられてあっ  
たからです。

The coach stopped in the courtyard of a robber's castle, the walls of which were cracked from top to bottom. Ravens and crows flew in and out of the holes and crevices, while great bulldogs, either of which looked as if it could swallow a man, were jumping about; but they were not allowed to bark.

大きな、煤すすけたひろまに  
は、煙がもうもうしていて、  
たき火が、赤あかと石だたみ  
のゆか上でもえていました。  
煙はてんじょうの下にたちま  
よって、どこからともなくで  
ていきました。大きなおなべ  
には、スープがにえたって、  
大うさぎ小うさぎが、あぶり  
ぐしにさして、やかれていま  
した。

In the large and smoky hall a bright fire was burning on the stone floor. There was no chimney; so the smoke went up to the ceiling, and found a way out for itself. Soup was boiling in a large cauldron, and hares and rabbits were roasting on the spit.

## 雪の女王

「おまえは、こん夜は、あたいや、あたいのちいさなどうぶつといっしょにねるのよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

ふたりはたべもの、のみものをもらうと、わらや、しきものがしいてある、へやのすみのほうへ行きました。

その上には、百ぱよりも、もっとたくさんのはとが、ねむったように、木摺きずりや、とまり木にとまっていたが、ふたりの女の子がきたときには、ちょっとこちらをむきました。

「みんな、このはと、あたいのものなのよ。」と、おいはぎのこむすめは行って、てばやく、てぢかにいた一わをつかまえて、足をゆすぶったので、はとは、羽根をばたばたやりました。

「せっぷんしておやりよ。」と、行って、おいはぎのこむすめは、それを、ゲルダの顔になげつけました。

“You shall sleep with me and all my little animals to-night,” said the robber-girl, after they had had something to eat and drink. So she took Gerda to a corner of the hall, where some straw and carpets were laid down.

Above them, on laths and perches, were more than a hundred pigeons, who all seemed to be asleep, although they moved slightly when the two little girls came near them.

“These all belong to me,” said the robber-girl; and she seized the nearest to her, held it by the feet, and shook it till it flapped its wings.

“Kiss it,” cried she, flapping it in Gerda’s face.

## The Snow Queen

「あすこにとまっているのが、森のあばれものさ。」と、そのむすめは、かべにあけたあなに、うちこまれたとまり木を、ゆびさしながら、また話しつつけました。

「あれは二わとも森のあばれものさ。しっかり、とじこめておかないと、すぐにげていってしまうの。ここにいるのが、昔からおともだちのべーよ。」こういって、女の子は、ぴかぴかみがいた、銅どうのくびわをはめたままつながれている、一ぴきのとなかいを、つのもってひきだしました。

「これも、しっかりつないでおかないと、にげていってしまうの。だから、あたいはね、まい晩よくきれるナイフで、くびのところをくすぐってやるんだよ。すると、それはびっくりするったらありゃしない。」

“There sit the wood-pigeons,” continued she, pointing to a number of laths and a cage which had been fixed into the walls, near one of the openings.

“Both rascals would fly away directly, if they were not closely locked up. And here is my old sweetheart ‘Ba;’” and she dragged out a reindeer by the horn; he wore a bright copper ring round his neck, and was tied up.

“We are obliged to hold him tight too, or else he would run away from us also. I tickle his neck every evening with my sharp knife, which frightens him very much.”



## 雪の女王

そういいながら、女の子はかべのわれめのところから、ながいナイフをとりだして、それをとなかいのくびにあてて、そろそろなでました。かわいそうに、そのけものは、足をどんどんやって、苦しがりました。むすめは、おもしろそうにわらって、それなりゲルダをつれて、ねどこに行きました。

「あなたはねているあいだ、ナイフをはなさないの。」と、ゲルダは、きみわるそうに、それをみました。

「わたい、しょっちゅうナイフをもっているよ。」と、おいはぎのこむすめはこたえました。「なにがはじまるかわからないからね。それよか、もういちどカイちゃんって子のお話をしてくれない、それから、どうしてこのひろい世界に、あてもなくでてきたのか、そのわけを話してくれないか。」

And then the robber-girl drew a long knife from a chink in the wall, and let it slide gently over the reindeer's neck. The poor animal began to kick, and the little robber-girl laughed, and pulled down Gerda into bed with her.

"Will you have that knife with you while you are asleep?" asked Gerda, looking at it in great fright.

"I always sleep with the knife by me," said the robber-girl. "No one knows what may happen. But now tell me again all about little Kay, and why you went out into the world."

## The Snow Queen

そこで、ゲルダははじめから、それをくりかえしました。森のはとが、頭の上のかごの中でくうくうっていました。ほかのはとはねむっていました。

Then Gerda repeated her story over again, while the wood-pigeons in the cage over her cooed, and the other pigeons slept.

おいはぎのこむすめは、かた手をゲルダのくびにかけて、かた手にはナイフをもったまま、大いびきをかいてねてしまいました。けれども、ゲルダは、目をつぶることもできませんでした。ゲルダは、いったい、じぶんは生かしておかれるのか、ころされるのか、まるでわかりませんでした。

The little robber-girl put one arm across Gerda's neck, and held the knife in the other, and was soon fast asleep and snoring. But Gerda could not close her eyes at all; she knew not whether she was to live or die.

たき火のぐるりをかこんで、おいはぎたちは、お酒をのんだり、歌をうたったりしていました。そのなかで、ばあさんがとんぼをきりました。

The robbers sat round the fire, singing and drinking, and the old woman stumbled about.

ちいさな女の子にとっては、そのありさまを見るだけで、こわいことでした。

It was a terrible sight for a little girl to witness.

## 雪の女王

そのとき、森のはとが、こういいました。

「くう、くう、わたしたち、カイちゃんを見ましたよ。一わの白いめんどりが、カイちゃんのそりをはこんでいました。カイちゃんは雪の女王のそりにのって、わたしたちが、巣にねていると、森のすぐ上を通過していったのですよ。雪の女王は、わたしたち子ばとに、つめたいいきをふきかけて、ころしてしまいました。たすかったのは、わたしたち二わだけ、くう、くう。」

「まあ、なにをそこでいってるの。」と、ゲルダが、つい大きなこえをしました。「その雪の女王さまは、どこへいったのでしょうかね。そのさきのこと、なにかしっていて。おしえてよ。」

「たぶん、ラップランドのほうへいったのでしょうかよ。そこには、年中、氷や雪がありますからね。まあ、つながれている、となかいに、きいてごらんさい。」

Then the wood-pigeons said, "Coo, coo; we have seen little Kay. A white fowl carried his sledge, and he sat in the carriage of the Snow Queen, which drove through the wood while we were lying in our nest. She blew upon us, and all the young ones died excepting us two. Coo, coo."

"What are you saying up there?" cried Gerda. "Where was the Snow Queen going? Do you know anything about it?"

"She was most likely travelling to Lapland, where there is always snow and ice. Ask the reindeer that is fastened up there with a rope."

## The Snow Queen

すると、となかいがひきとって、「そこには年中、氷や雪があって、それはすばらしいみごとなものですよ。」といいました。

「そこでは大きな、きらきら光る谷まを、自由にはしりまわることができますし、雪の女王は、そこに夏のテントをもっています。でも女王のりっぱな本城ほんじょうは、もっと北極のほうの、スピッツベルゲンという島の上にあるのです。」

「ああ、カイちゃんは、すきなカイちゃんは。」と、ゲルダはためいきをつきました。

「しずかにしなよ。しないと、ナイフをからだにつきさすよ。」と、おいはぎのこむすめがいました。

“Yes, there is always snow and ice,” said the reindeer; “and it is a glorious place; you can leap and run about freely on the sparkling ice plains. The Snow Queen has her summer tent there, but her strong castle is at the North Pole, on an island called Spitzbergen.”

“Oh, Kay, little Kay!” sighed Gerda.

“Lie still,” said the robber-girl, “or I shall run my knife into your body.”

## 雪の女王

あさになって、ゲルダは、森のはとが話したことを、すっかりおいはぎのこむすめに話しました。するとむすめは、たいそうまじめになって、うなずきながら、  
「まあいいや。どっちにしてもおなじことだ。」と、いいました。そして、「おまえ、ラップランドって、どこにあるのかしってるのかい。」と、むすめは、となかいにたずねました。

「わたしほど、それをよく知っているものがございましょうか。」と、目をかがやかしながら、となかいがこたえました。「わたしはそこで生まれて、そだったのです。わたしはそこで、雪の野原を、はしりまわっていました。」

In the morning Gerda told her all that the wood-pigeons had said; and the little robber-girl looked quite serious, and nodded her head, and said, "That is all talk, that is all talk. Do you know where Lapland is?" she asked the reindeer.

"Who should know better than I do?" said the animal, while his eyes sparkled. "I was born and brought up there, and used to run about the snow-covered plains."

## The Snow Queen

「ごらん。みんなでかけていってしまうだろう。おっかさんだけがうちにいる。おっかさんは、ずっとうちののこっているのよ。でもおひるちかくなると、大きなびんからお酒をのんで、すこしのあいだ、ひるねするから、そのとき、おまえにいいことをしてあげようよ。」と、おいはぎのこむすめはゲルダにいいました。

“Now listen,” said the robber-girl; “all our men are gone away,— only mother is here, and here she will stay; but at noon she always drinks out of a great bottle, and afterwards sleeps for a little while; and then, I’ll do something for you.”

それから女の子は、ぱんと、ねどこからはねおきて、おっかさんのくびのまわりにかじりついて、おっかさんのひげをひっぱりながら、こういいました。

Then she jumped out of bed, clasped her mother round the neck, and pulled her by the beard, crying, “My own little nanny goat, good morning.”

「かわいい、めやぎさん、おはようございます。」

すると、おっかさんは、女の子のはなが赤くなったり紫色むらさきいろになったりするまで、ゆびではじきました。でもこれは、かわいくてたまらない心からすることでした。

Then her mother filliped her nose till it was quite red; yet she did it all for love.

## 雪の女王

おっかさんが、びんのお酒をのんで、ねてしまったとき、おいはぎのこむすめは、となかいのところへ行って、こういいました。

「わたしはもっと、なんべんも、なんべんも、ナイフでおまえを、くすぐってやりたいのだよ。だって、ずいぶんおかしいんだもの、でも、もういいさ。あたい、おまえがラップランドへ行けるように、つなをほどいてにがしてやろう。けれど、おまえはせっせとはしって、この子を、この子のおともだちのいる、雪の女王のごてんへ、つれていかなければいけないよ。

おまえ、この子があたいに話していたこと、きいていたろう。とても大きなこえで話したし、おまえも耳をすまして、きいていたのだから。」

When the mother had drunk out of the bottle, and was gone to sleep, the little robber-maiden went to the reindeer, and said, "I should like very much to tickle your neck a few times more with my knife, for it makes you look so funny; but never mind,—I will untie your cord, and set you free, so that you may run away to Lapland; but you must make good use of your legs, and carry this little maiden to the castle of the Snow Queen, where her play-fellow is.

You have heard what she told me, for she spoke loud enough, and you were listening."

## The Snow Queen

となかいはよろこんで、高くはねあがりました。その背中においはぎのこむすめは、ゲルダをのせてやりました。そして用心ようじんぶかく、ゲルダをしっかりといわえつけて、その上、くらのかわりに、ちいさなふとんまで、しいてやりました。

「まあ、どうでもいいや。」と、こむすめはいいました。「そら、おまえの毛皮のながぐつだよ。だんだんさむくなるからね。マッフはきれいだからもらっておくわ。けれど、おまえにさむいおもいはさせないわ。ほら、おっかさんの大きなまる手ぶくろがある。おまえなら、ひじのところまで、ちょうどとどくだろう。まあ、これをはめると、おまえの手が、まるであたいのいやなおっかさんの手のようだよ。」と、むすめはいいました。

ゲルダは、もううれしくて、涙なみだがこぼれました。

Then the reindeer jumped for joy; and the little robber-girl lifted Gerda on his back, and had the forethought to tie her on, and even to give her her own little cushion to sit on.

“Here are your fur boots for you,” said she; “for it will be very cold; but I must keep the muff; it is so pretty. However, you shall not be frozen for the want of it; here are my mother’s large warm mittens; they will reach up to your elbows. Let me put them on. There, now your hands look just like my mother’s.”

But Gerda wept for joy.



## 雪の女王

「泣くなんて、いやなことだね。」と、おいはぎのこむすめはいいました。「ほんとは、うれしいはずじゃないの。さあ、ここにふたつ、パンのかたまりと、ハムがあるわ。これだけあれば、ひもじいおもいはしないだろう。」

"I don't like to see you fret," said the little robber-girl; "you ought to look quite happy now; and here are two loaves and a ham, so that you need not starve."

これらの品じなは、となかいの背中の上ろにいわえつけられました。おいはぎのこむすめは戸をあけて、大きな犬をだまして、中にいれておいて、それから、よくきれるナイフでつなをきると、となかいにむかっていいました。「さあ、はしって。そのかわり、その子に、よく気をつけてやってよ。」

These were fastened on the reindeer, and then the little robber-maiden opened the door, coaxed in all the great dogs, and then cut the string with which the reindeer was fastened, with her sharp knife, and said, "Now run, but mind you take good care of the little girl."



## The Snow Queen

そのとき、ゲルダは、大きな  
まる手ぶくろをはめた両手  
を、おいはぎのこむすめのほ  
うにさしのばして、「さよう  
なら。」といいました。とた  
んに、となかいはかけだしま  
した。木の根、岩かどをとび  
こえ、大きな森をつきぬけ  
て、沼地や草原もかまわず、  
いっしょうけんめい、まっし  
ぐらにはしっていきました。

おおかみがほえ、わたりがら  
すがこえをたてました。ひゅ  
ッ、ひゅッ、空で、なにか音  
がしました。それはまるで花  
火があがったように。

「あれがわたしのなつかしい  
北極オーロラ光です。」と、  
となかいはいいました。「ご  
らんなさい。なんてよく、か  
がやいているでしょう。」  
それからとなかいは、ひるも  
夜も、前よりももっとはやく  
はしって行きました。  
パンのかたまりもなくなりま  
した。ハムもたべつくしまし  
た。となかいとゲルダとは、  
ラップランドにつきました。

And then Gerda stretched out her hand, with the great mitten on it, towards the little robber-girl, and said, "Farewell," and away flew the reindeer, over stumps and stones, through the great forest, over marshes and plains, as quickly as he could.

The wolves howled, and the ravens screamed; while up in the sky quivered red lights like flames of fire.

"There are my old northern lights," said the reindeer; "see how they flash." And he ran on day and night still faster and faster, but the loaves and the ham were all eaten by the time they reached Lapland.

## 雪の女王

第六のお話。ラップランド  
の女とフィンランドの女

ちいさな、そまつなこやの前で、となかいはとまりました。そのこやはたいそうみすぼらしくて、屋根やねは地面じめんとすれすれのところまでも、おおいかぶさっていました。そして、戸口がたいそうひくくついているものですから、うちの人が出たり、はいったりするときには、はらばいになって、そこをくぐらなければなりませんでした。

その家には、たったひとり年をとったラップランドの女がいて、鯨油げいゆランプのそばで、おさかなをやっていました。となかいはそのおばあさんに、ゲルダのことをすっかり話してきかせました。でも、その前にじぶんのことをまず話しました。となかいは、じぶんの話のほうが、ゲルダの話よりたいせつだとおもったからでした。ゲルダはさむさに、ひどくやられていて、口をきくことができませんでした。

Sixth Story: The Lapland  
Woman and the Finland  
Woman

They stopped at a little hut; it was very mean looking; the roof sloped nearly down to the ground, and the door was so low that the family had to creep in on their hands and knees, when they went in and out.

There was no one at home but an old Lapland woman, who was cooking fish by the light of a train-oil lamp. The reindeer told her all about Gerda's story, after having first told his own, which seemed to him the most important, but Gerda was so pinched with the cold that she could not speak.

## The Snow Queen

「やれやれ、それはかわいそうに。」と、ラップランドの女はいいました。「おまえたちはまだまだ、ずいぶんとおくはしって行かなければならないよ。百マイル以上も北のフィンマルケンのおくふかくはいらなければならないのだよ。雪の女王はそこにいて、まい晩、青い光を出す花火をもやしているのさ。

“Oh, you poor things,” said the Lapland woman, “you have a long way to go yet. You must travel more than a hundred miles farther, to Finland. The Snow Queen lives there now, and she burns Bengal lights every evening.

わたしは紙をもっていないから、干鱈ひだらのうえに、てがみをかいてあげよう。これをフィンランドの女のところへもっておいで。その女のほうが、わたしよりもくわしく、なんでも教えてくれるだろうからね。」

I will write a few words on a dried stock-fish, for I have no paper, and you can take it from me to the Finland woman who lives there; she can give you better information than I can.”

さてゲルダのからだもあたたまり、たべものやのみものでげんきをつけてもらったとき、ラップランドの女は、干鱈ひだらに、ふたことみこと、もんくをかきつけて、それをたいせつにもっていくように、とってだしました。ゲルダは、またとなかいにいわえつけられてでかけました。

So when Gerda was warmed, and had taken something to eat and drink, the woman wrote a few words on the dried fish, and told Gerda to take great care of it. Then she tied her again on the reindeer, and he set off at full speed.

## 雪の女王

ひゅっひゅっ、空の上でまた  
いました。ひと晩中、この  
上もなくうつくしい青色をし  
た、極光オーロラがもえてい  
ました。――さて、こうし  
て、となかいとゲルダとは、  
フィンマルケンにつきました  
。そして、フィンランドの  
女の家のえんとつを、こつこ  
つたたきました。だってその  
家には、戸口もついていませ  
んでした。

家の中は、たいへんあついの  
で、その女の人、まるで  
だか同様でした。せいのひく  
いむさくるしいようすの女で  
した。

女はすぐに、ゲルダの着物  
や、手ぶくろや、ながぐつを  
ぬがせました。そうしなけれ  
ば、とてもあつくて、そこ  
にはいられなかったからです  
。それから、となかいのあたま  
の上に、ひとかけ、氷のかた  
まりを、のせてやりました。

Flash, flash, went the beautiful blue northern lights in the air the whole night long. And at length they reached Finland, and knocked at the chimney of the Finland woman's hut, for it had no door above the ground.

They crept in, but it was so terribly hot inside that that woman wore scarcely any clothes; she was small and very dirty looking.

She loosened little Gerda's dress, and took off the fur boots and the mittens, or Gerda would have been unable to bear the heat; and then she placed a piece of ice on the reindeer's head, and read what was written on the dried fish.

## The Snow Queen

そして、ひだらにかきつけてあるもんくを、三べんもくりかえしてよみました。そしてすっかりおぼえこんでしまうと、スープをこしらえる大なべの中へ、たらをなげこみました。そのたらはたべることができたからで、この女の方は、けっしてどんなものでも、むだにはしませんでした。

After she had read it three times, she knew it by heart, so she popped the fish into the soup saucepan, as she knew it was good to eat, and she never wasted anything.

さて、となかいは、まずじぶんのことを話して、それからゲルダのことを話しました。するとフィンランドの女は、そのりこうそうな目をしばたいたただけで、なにもいいませんでした。

The reindeer told his own story first, and then little Gerda's, and the Finlander twinkled with her clever eyes, but she said nothing.

## 雪の女王

「あなたは、たいそう、かしくくていらっしゃいますね。」と、となかいは、いいました。「わたしはあなたが、いっぽんのより糸で、世界中の風をつなぐことがおできになると、きいております。もしも舟のりが、そのいちばんはじめのむすびめをほどくなら、つごうのいい追風がふきます。二ばんめのむすびめだったら、つよい風がふきます。三ばんめと四ばんめをほどくなら、森ごとふきたおすほどのあらしがふきすさみます。

どうか、このむすめさんに、十二人りきがついて、しゅびよく雪の女王にかてますよう、のみものをひとつ、つくってやっていただけませんか。」

「十二人りきかい。さぞ役にたつ（「たつ」は底本では「たっ」）だろうよ。」と、フィンランド（「フィンランド」は底本では「フィランド」）の女はくりかえしていいました。

“You are so clever,” said the reindeer; “I know you can tie all the winds of the world with a piece of twine. If a sailor unties one knot, he has a fair wind; when he unties the second, it blows hard; but if the third and fourth are loosened, then comes a storm, which will root up whole forests.

Cannot you give this little maiden something which will make her as strong as twelve men, to overcome the Snow Queen?”

“The Power of twelve men!” said the Finland woman; “that would be of very little use.”

## The Snow Queen

それから女の方は、たなのところへ行って、大きな毛皮のまいたものをもってきてひろげました。それには、ふしぎなもんじがかいてありましたが、フィンランドの女は、ひたいから、あせがたれるまで、それをよみかえました。

But she went to a shelf and took down and unrolled a large skin, on which were inscribed wonderful characters, and she read till the perspiration ran down from her forehead.

でも、となかいは、かわいいゲルダのために、またいっしょうけんめい、その女の方にたのみました。ゲルダも目に涙をいっばいためて、おがむように、フィンランドの女を見あげました。女はまた目をしばたたきはじめました。そして、となかいをすみのほうへつれて行って、そのあたみにあたらしい氷をのせてやりながら、こうつぶやきました。

But the reindeer begged so hard for little Gerda, and Gerda looked at the Finland woman with such beseeching tearful eyes, that her own eyes began to twinkle again; so she drew the reindeer into a corner, and whispered to him while she laid a fresh piece of ice on his head,



## 雪の女王

「カイって子は、ほんとうに雪の女王のお城にいるのだよ。そして、そこにあるものはなんでも気に入ってしまって、世界にこんないいところはないとおもっているんだよ。けれどそれというのも、あれの目のなかには、鏡のかけらがはいっているし、しんぞうのなかにはだって、ちいさなかけらがはいっているからなのだよ。だからそんなものを、カイからとりだしてしまわないうちは、あれはけっしてまにんげんになることはできないし、いつまでも雪の女王のいうなりになっていることだろうよ。」

「では、どんなものにも、うちかつことのできる力になるようなものを、ゲルダちゃんにくださるわけにはいかないでしょうか。」

“Little Kay is really with the Snow Queen, but he finds everything there so much to his taste and his liking, that he believes it is the finest place in the world; but this is because he has a piece of broken glass in his heart, and a little piece of glass in his eye. These must be taken out, or he will never be a human being again, and the Snow Queen will retain her power over him.”

“But can you not give little Gerda something to help her to conquer this power?”

## The Snow Queen

「このむすめに、生まれついてもっている力よりも、大きな力をさずけることは、わたしにはできないことなのだよ。まあ、それはおまえさんにも、あのむすめがいまもっている力が、どんなに大きな力だかわかるだろう。ごらん、どんなにして、いろいろと人間やどうぶつが、あのむすめひとりのためにしてやっているか、どんなにして、はだしのくせに、あのむすめがよくもこんなとおくまでやってこられたか。

それだもの、あのむすめは、わたしたちから、力をえようとしてもだめなのだよ。それはあのむすめの心のなかにあるのだよ。それがかわいいむじゃきなこどもだというところにあるのだよ。

もし、あのむすめが、自分で雪の女王のところへ、でかけて行って、カイからガラスのかけらをとりだすことができないようなら、まして、わたしたちの力におよばないことさ。

"I can give her no greater power than she has already," said the woman; "don't you see how strong that is? How men and animals are obliged to serve her, and how well she has got through the world, barefooted as she is.

She cannot receive any power from me greater than she now has, which consists in her own purity and innocence of heart.

If she cannot herself obtain access to the Snow Queen, and remove the glass fragments from little Kay, we can do nothing to help her.

## 雪の女王

もうここから二マイルばかりで、雪の女王のお庭の入口になるから、おまえはそこまで、あの女の子をはこんでいって、雪の中で、赤い実みをつけてしげっている、大きな木やぶのところに、おろしてくるがいい。それで、もうよけいな口をきかないで、さっさとかえっておいで。」

こういって、フィンランドの女は、ゲルダを、となかいのせなかにのせました。そこで、となかいは、ぜんそくりよくで、はしりだしました。

Two miles from here the Snow Queen's garden begins; you can carry the little girl so far, and set her down by the large bush which stands in the snow, covered with red berries. Do not stay gossiping, but come back here as quickly as you can."

Then the Finland woman lifted little Gerda upon the reindeer, and he ran away with her as quickly as he could.

## The Snow Queen

「ああ、あたしは、長ぐつをおいてきたわ。手ぶくろもおいてきてしまった。」と、ゲルダはさげびました。とたんに、ゲルダは身をきるようなさむさをかんじました。でも、となかいはけっしてとまろうとはしませんでした。それは赤い実みのなった木やぶのところへくるまで、いっさんばしりに、はしりつづけました。そして、そこでゲルダをおろして、くちのところにせっぷんしました。大つぶの涙が、となかいの頬ほおを流れました。それから、となかいはまた、いっさんばしりに、はしって行ってしまいました。

かわいそうに、ゲルダは、くつもはかず、手ぶくろもはめずに、氷にとじられた、さびしいフィンマルケンのまっただなかに、ひとりどりのこされて立っていました。

“Oh, I have forgotten my boots and my mittens,” cried little Gerda, as soon as she felt the cutting cold, but the reindeer dared not stop, so he ran on till he reached the bush with the red berries; here he set Gerda down, and he kissed her, and the great bright tears trickled over the animal’s cheeks; then he left her and ran back as fast as he could.

There stood poor Gerda, without shoes, without gloves, in the midst of cold, dreary, ice-bound Finland.

## 雪の女王



ゲルダは、いっしょうけんめいかけだしました。すると、雪の大軍が、むこうからおしよせてきました。けれど、その雪は、空からふってくるのではありません。空は極光オーロラにてらされて、きらきらかがやいていました。

She ran forwards as quickly as she could, when a whole regiment of snow-flakes came round her; they did not, however, fall from the sky, which was quite clear and glittering with the northern lights.

雪は地面の上をまっすぐに走ってきて、ちかくにくればくるほど、形が大きくなりました。

The snow-flakes ran along the ground, and the nearer they came to her, the larger they appeared.

## The Snow Queen

ゲルダは、いつか虫めがねでのぞいたとき、雪のひとひらがどんなにか大きくみえたことを、まだおぼえていました。けれども、この雪はほんとうに、ずっと大きく、ずっとおそろしくみえました。この雪は生きていました。それは雪の女王の前哨ぜんしょうでした。

Gerda remembered how large and beautiful they looked through the burning-glass. But these were really larger, and much more terrible, for they were alive, and were the guards of the Snow Queen, and had the strangest shapes.

そして、ずいぶんへんてこな形をしていました。大きくてみにくい、やまあらしのようなものもいれば、かまくびをもたげて、とぐろをまいているへびのようなかっこうのもあり、毛のさかさにはえた、ふとった小ぐまに似たものもありました。それはみんなまぶしいように、ぎらぎら白くひかりました。これこそ生きた雪の大軍でした。

Some were like great porcupines, others like twisted serpents with their heads stretching out, and some few were like little fat bears with their hair bristled; but all were dazzlingly white, and all were living snow-flakes.

そこでゲルダは、いつもの主しゅの祈の「われらの父」をとなえました。さむさはとてもひどくて、ゲルダはじぶんのつくいきを見ることができました。それは、口からけむりのようにたちのぼりました。

Then little Gerda repeated the Lord's Prayer, and the cold was so great that she could see her own breath come out of her mouth like steam as she uttered the words.

## 雪の女王

そのいきはだんだんこくなって、やがてちいさい、きゃしゃな天使になりました。それが地びたにつくといっしょに、どんどん大きくなりました。天使たちはみな、かしらにはかぶとをいただき、手には楯たてとやりをもっていました。

The steam appeared to increase, as she continued her prayer, till it took the shape of little angels who grew larger the moment they touched the earth. They all wore helmets on their heads, and carried spears and shields.

天使の数はだんだんふえるばかりでした。そして、ゲルダが主のおいのりをおわったときには、りっぱな天使軍の一台が、ゲルダのぐるりを取りまいていました。

Their number continued to increase more and more; and by the time Gerda had finished her prayers, a whole legion stood round her.

天使たちはやりをふるって、おそろしい雪のへいたいをうちたおすと、みんなちりぢりになってしまいました。そこでゲルダは、ゆうきをだして、げんきよく進んで行くことができました。

They thrust their spears into the terrible snowflakes, so that they shivered into a hundred pieces, and little Gerda could go forward with courage and safety.

天使たちは、ゲルダの手と足をさすりました。するとゲルダは、前ほどさむさを感じなくなって、雪の女王のお城をめがけていそぎました。

The angels stroked her hands and feet, so that she felt the cold less, and she hastened on to the Snow Queen's castle.

## The Snow Queen

ところで、カイは、あののち、どうしていたでしょう。それからまずお話をすすめましょう。カイは、まるでゲルダのことなど、おもってはいませんでした。だから、ゲルダが、雪の女王のごてんまできているなんて、どうして、ゆめにもおもわないことでした。

第七のお話。雪の女王のお城でのできごととそのちのお話

雪の女王のお城は、はげしくふきたまる雪が、そのままかべになり、窓や戸口は、身をきるような風で、できていました。

But now we must see what Kay is doing. In truth he thought not of little Gerda, and never supposed she could be standing in the front of the palace.

Seventh Story: Of the Palace of the Snow Queen and What Happened There At Last

The walls of the palace were formed of drifted snow, and the windows and doors of the cutting winds.



## 雪の女王

そこには、百いじょうの広間が、じゅんにならんでいました。それはみんな雪のふきたまったものでした。いちばん大きな広間はなんマイルにもわたっていました。つよい極光オーロラがこの広間をもてらして、それはただもう、ばか大きく、がらんとして、いかにも氷のようにつめたく、ぎらぎらして見えました。

たのしみというものの、まるでないところでした。あらしが音楽をかなでて、ほっきょくぐまがあと足で立ちあがって、気どっておどるダンスの会もみられません。わかい白ぎつねの貴婦人きふじんのあいだに、ささやかなお茶ちゃの会かいがひらかれることはありません。雪の女王の広間は、ただもうがらんとして、だだっぴろく、そしてさむいばかりでした。

極光のもえるのは、まことにきそく正しいので、いつがいちばん高いか、いつがいちばんひくいかな、はっきり見ることができました。

There were more than a hundred rooms in it, all as if they had been formed with snow blown together. The largest of them extended for several miles; they were all lighted up by the vivid light of the aurora, and they were so large and empty, so icy cold and glittering!

There were no amusements here, not even a little bear's ball, when the storm might have been the music, and the bears could have danced on their hind legs, and shown their good manners. There were no pleasant games of snap-dragon, or touch, or even a gossip over the tea-table, for the young-lady foxes. Empty, vast, and cold were the halls of the Snow Queen.

The flickering flame of the northern lights could be plainly seen, whether they rose high or low in the heavens, from every part of the castle.

## The Snow Queen

このはてしなく大きながらんとした雪の広間のまん中に、なん千万という数のかけらにわれてこおった、みずうみがありました。われたかけらは、ひとつひとつおなじ形をして、これがあつまって（「あつまって」は底本では「あまって」）、りっぱな美術品になっていました。このみずうみのまん中に、お城にいるとき、雪の女王はすわっていました。そしてじぶんは理性りせいの鏡のなかにすわっているのだ（「いるのだ」は底本では「い のだ」）、この鏡ほどのものは、世界中さがしてもない、とっていました。

In the midst of its empty, endless hall of snow was a frozen lake, broken on its surface into a thousand forms; each piece resembled another, from being in itself perfect as a work of art, and in the centre of this lake sat the Snow Queen, when she was at home. She called the lake "The Mirror of Reason," and said that it was the best, and indeed the only one in the world.

## 雪の女王



カイはここにいて、さむさのため、まっ青に、というよりは、うす黒くなっていました。それでいて、カイはさむさを感じませんでした。というよりは、雪の女王がせつぷんして、カイのからだから、さむさをすいってしまったからです。そしてカイのしんぞうは、氷のようになっていました。

Little Kay was quite blue with cold, indeed almost black, but he did not feel it; for the Snow Queen had kissed away the icy shiverings, and his heart was already a lump of ice.

## The Snow Queen

カイは、たいらな、いく枚かのうすい氷の板を、あっちこっちからはこんできて、いろいろにそれをくみあわせて、なにかつくりようとしていました。まるでわたしたちが、むずかしい漢字をくみ合わせるようでした。

He dragged some sharp, flat pieces of ice to and fro, and placed them together in all kinds of positions, as if he wished to make something out of them; just as we try to form various figures with little tablets of wood which we call "a Chinese puzzle."

カイも、この上なく手のこんだ、みごとな形をつくりあげました。それは氷のちえあそびでした。カイの目には、これらのものの形はこのうえなくりっぱな、この世の中で一番（「ばん」は底本では「ぱん」）たいせつなもののようにみえました。それはカイの目にささった鏡のかけらのせいでした。カイは、形のひとつのことばをかきあらわそうとおもって、のこらずの氷の板をならべてみましたが、自分があらわしたいとおもうことば、すなわち、「永遠えいえん」ということばを、どうしてもつくりだすことはできませんでした。でも、女王はっていました。

Kay's fingers were very artistic; it was the icy game of reason at which he played, and in his eyes the figures were very remarkable, and of the highest importance; this opinion was owing to the piece of glass still sticking in his eye. He composed many complete figures, forming different words, but there was one word he never could manage to form, although he wished it very much. It was the word "Eternity." The Snow Queen had said to him,

## 雪の女王

「もしおまえに、その形をつくることがわかれば、からだも自由になるよ。そうしたら、わたしは世界ぜんたいと、あたらしいそりぐつを、いっそくあげよう。」

“When you can find out this, you shall be your own master, and I will give you the whole world and a new pair of skates.”

けれども、カイには、それができませんでした。

But he could not accomplish it.

「これから、わたしは、あたたかい国を、ざっとひとまわりしてこよう。」と、雪の女王はいいました。「ついでにそこの黒なべをのぞいてくる。」黒なべというのは、エトナとかヴェスヴィオとか、いろんな名の、火をはく山のことでした。「わたしはすこしばかり、それを白くしてやろう。ぶどうやレモンをおいしくするためにいいそうだから。」

“Now I must hasten away to warmer countries,” said the Snow Queen. “I will go and look into the black craters of the tops of the burning mountains, Etna and Vesuvius, as they are called,—I shall make them look white, which will be good for them, and for the lemons and the grapes.”

## The Snow Queen

こういって、雪の女王は、とんでいってしまいました。そしてカイは、たったひとりぼっちで、なんマイルというひろさのある、氷の大広間のなかで、氷の板を見つめて、じっと考えこんでいました。もう、こちこちになって、おなかのなかの氷が、みしりみしりいうかとおもうほど、じつとうごかずにいました。それをみたら、たれも、カイはこおりついたなり、死んでしまったのだとおもったかもしれません。

And away flew the Snow Queen, leaving little Kay quite alone in the great hall which was so many miles in length; so he sat and looked at his pieces of ice, and was thinking so deeply, and sat so still, that any one might have supposed he was frozen.

## 雪の女王

ちょうどそのとき、ゲルダは大きな門を通過して、その大広間にはいって来ました。そこには、身をきるような風が、ふきすさんでいましたが、ゲルダが、ゆうべのおいのりをあげると、ねむったように、しずかになってしまいました。そして、ゲルダは、いくつも、いくつも、さむい、がらんとしたひろまをぬけて、——とうとう、カイを見つけました。ゲルダは、カイをおぼえていました。で、いきなりカイのくびすじにとびついて、しっかりだきしめながら、

「カイ、すきなカイ。ああ、あたしとうとう、みつけたわ。」と、さけびました。

けれども、カイは身ゆるぎもしずに、じっとしゃちほこばったなり、つめたくなっていました。

Just at this moment it happened that little Gerda came through the great door of the castle. Cutting winds were raging around her, but she offered up a prayer and the winds sank down as if they were going to sleep; and she went on till she came to the large empty hall, and caught sight of Kay; she knew him directly; she flew to him and threw her arms round his neck, and held him fast, while she exclaimed,

“Kay, dear little Kay, I have found you at last.”

But he sat quite still, stiff and cold.

## The Snow Queen

そこで、ゲルダは、あつい涙を流して泣きました。それはカイのむねの上におちて、しんぞうのなかにまで、しみこんで行きました。そこにたまった氷をとかして、しんぞうの中の、鏡のかけらをなくなしてしまいました。カイは、ゲルダをみました。ゲルダはうたいました。

Then little Gerda wept hot tears, which fell on his breast, and penetrated into his heart, and thawed the lump of ice, and washed away the little piece of glass which had stuck there. Then he looked at her, and she sang—

「ばらのはな さきてはちりぬ  
おさなごエス やがてあおが  
ん」

*“Roses bloom and cease to be,  
But we shall the Christ-child see.”*

すると、カイはわっと泣きだしました。カイが、あまりひどく泣いたものですから、ガラスのとげが、目からぽろりとぬけてでてしまいました。すぐとカイは、ゲルダがわかりました。そして、大よろこびで、こえをあげました。

Then Kay burst into tears, and he wept so that the splinter of glass swam out of his eye. Then he recognized Gerda, and said, joyfully,

「やあ、ゲルダちゃん、すきなゲルダちゃん。——いままでどこへいったの、そしてまた、ぼくはどこにいたんだろう。」

*“Gerda, dear little Gerda, where have you been all this time, and where have I been?”*



## 雪の女王

こういって、カイは、そこら  
をみまわしました。「ここ  
は、ずいぶんさむいんだな  
あ。なんて大きくて、がらん  
としているんだろうなあ。」

And he looked all around him, and said, "How cold it is, and how large and empty it all looks," and he clung to Gerda, and she laughed and wept for joy.

こういって、カイは、ゲルダ  
に、ひしととりつきました。  
ゲルダは、うれしまぎれに、  
泣いたり、わらったりしまし  
た。それがあまりたのしそ  
うなので、氷の板きれまでが、  
はしゃいでおどりだしまし  
た。そして、おどりつかれて  
たおれてしまいました。その  
たおれた形が、ひとりでは、  
ことばをつづっていました。  
それは、もしカイに、そのこ  
とばがつづれたら、カイは自  
由になれるし、そしてあた  
らしいそりぐつと、のこらず  
の世界をやろうと、雪の女王  
がいった、そのことばでした。

It was so pleasing to see them that the pieces of ice even danced about; and when they were tired and went to lie down, they formed themselves into the letters of the word which the Snow Queen had said he must find out before he could be his own master, and have the whole world and a pair of new skates.

## The Snow Queen

ゲルダは、カイのほおにせつぷんしました。みるみるそれはほおと赤くなりました。それからカイの目にもせつぷんしました。すると、それはゲルダの目のように、かがやきだしました。カイの手だの足だのにもせつぷんしました。これで、しっかりしてげんきになりました。

Then Gerda kissed his cheeks, and they became blooming; and she kissed his eyes, and they shone like her own; she kissed his hands and his feet, and then he became quite healthy and cheerful.

もうこうなれば、雪の女王がかえってきても、かまいません。だって、女王が、それができればゆるしてやるといったことばが、ぴかぴかひかる氷のもんじで、はっきりとそこにかかれていたからです。

The Snow Queen might come home now when she pleased, for there stood his certainty of freedom, in the word she wanted, written in shining letters of ice.

さて、そこでふたりは手を取りあって、その大きなお城からそとへでました。そして、うちのおばあさんの話だの、屋根の上のばらのことなどを、語りあいました。ふたりが行くさきざきには、風もふかず、お日さまの光がかがやきだしました。

Then they took each other by the hand, and went forth from the great palace of ice. They spoke of the grandmother, and of the roses on the roof, and as they went on the winds were at rest, and the sun burst forth.

## 雪の女王

そして、赤い実みのなった、あの木やぶのあるところにきたとき、そこにもう、となかいがいて、ふたりをまっていた。そのとなかいは、もう一匹きのわかいとなかいはつれていました。そして、このわかいほうは、ふくれた乳ぶさからふたりのこどもたちに、あたたかいおちちを出してのませてくれて、そのくちの上にせっぷんしました。

それから二匹きのとなかいは、カイとゲルダをのせて、まずフィンランドの女のところへ行きました。そこでふたりは、あのあついへやで、じゅうぶんからだをあたためて、うちへかえる道をおしえてもらいました。それからこんどは、ラップランドの女のところへいきました。その女は、ふたりにあたらしい着物をつくってくれたり、そりをそろえてくれたりしました。

When they arrived at the bush with red berries, there stood the reindeer waiting for them, and he had brought another young reindeer with him, whose udders were full, and the children drank her warm milk and kissed her on the mouth.

Then they carried Kay and Gerda first to the Finland woman, where they warmed themselves thoroughly in the hot room, and she gave them directions about their journey home. Next they went to the Lapland woman, who had made some new clothes for them, and put their sleighs in order.

## The Snow Queen

となかいと、もう一ひきのとなかいとは、それなり、ふたりのそりについてはしって、国境くにざかいまでおくってきてくれました。そこでは、はじめて草の緑が（「が」は底本では「か」）もえだしていました。カイとゲルダとは、ここで、二ひきのとなかいと、ラップランドの女とにわかれしました。  
「さようなら。」と、みんなはいいました。

そして、はじめて、小鳥がさえずりだしました。森には、緑の草の芽が、いっぱいにふいていました。その森の中から、うつくしい馬にのった、わかいむすめが、赤いぴかぴかするぼうしをかぶり、くらにピストルを二ちょうさして、こちらにやってきました。ゲルダはその馬をしっていました。（それは、ゲルダの金きんの馬車をひっぱった馬であったからです。）

Both the reindeer ran by their side, and followed them as far as the boundaries of the country, where the first green leaves were budding. And here they took leave of the two reindeer and the Lapland woman, and all said—Farewell.

Then the birds began to twitter, and the forest too was full of green young leaves; and out of it came a beautiful horse, which Gerda remembered, for it was one which had drawn the golden coach. A young girl was riding upon it, with a shining red cap on her head, and pistols in her belt.

## 雪の女王

そして、このむすめは、れいのおいはぎのこむすめでした。この女の子は、もう、うちにいるのがいやになって、北の国のほうへ行ってみたいとおもっていました。そしてもし、北の国が気にいらなかったら、どこかほかの国へ行ってみたいとおもっていました。

It was the little robber-maiden, who had got tired of staying at home; she was going first to the north, and if that did not suit her, she meant to try some other part of the world.

このむすめは、すぐにゲルダに気がつきました。ゲルダもまた、このむすめをみつけました。そして、もういちどあえたことを、心からよろこびました。

She knew Gerda directly, and Gerda remembered her: it was a joyful meeting.

「おまえさん、ぶらつきやのほうでは、たいしたおやぶんだよ。」と、そのむすめは、カイにいいました。「おまえさんのために、世界のはてまでもさがしにいったら、あつたのかしら。」

"You are a fine fellow to go gadding about in this way," said she to little Kay, "I should like to know whether you deserve that any one should go to the end of the world to find you."

けれども、ゲルダは、そのむすめのほおを、かるくさすりながら、王子と王女とは、あののちどうなったかとききました。

But Gerda patted her cheeks, and asked after the prince and princess.

## The Snow Queen

「あの人たちは、外国へいってしまったのさ。」と、おいはぎのこむすめがこたえました。

“They are gone to foreign countries,” said the robber-girl.

「それで、からすはどうして。」と、ゲルダはたずねました。

“And the crow?” asked Gerda.

「ああ、からすは死んでしまったよ。」と、むすめがいました。「それでさ、おかみさんがらすも、やもめになって、黒い毛糸の喪章もしょうを足につけてね、ないてばかりいるっていうけれど、うわさだけだろう。さあ、こんどは、あれからどんな旅をしたか、どうしてカイちゃんをつかまえたか、話しておくれ。」

“Oh, the crow is dead,” she replied; “his tame sweetheart is now a widow, and wears a bit of black worsted round her leg. She mourns very pitifully, but it is all stuff. But now tell me how you managed to get him back.”

そこで、カイとゲルダとは、かわりあって、のこらずの話をしました。

Then Gerda and Kay told her all about it.

「そこで、よろしく、ちんがらもんがらか、でも、まあうまく行って、よかったわ。」と、むすめはいいました。

“Snip, snap, snare! it’s all right at last,” said the robber-girl.

Then she took both their hands, and promised that if ever she should pass through the town, she would call and pay them a visit.

## 雪の女王

そして、ふたりの手をとって、もしふたりのすんでいる町を通ることがあったら、きっとたずねようと、やくそくしました。それから、むすめは馬をとばして、ひろい世界へでて行きました。でも、カイとゲルダとは、手を取りあって、あるいていきました。いくほど、そこらが春めいてきて、花がさいて、青葉がしげりました。お寺の鐘かねがきこえて、おなじみの高い塔とうと、大きな町が見えてきました。それこそ、ふたりがすんでいた町でした。

そこでふたりは、おばあさまの家の戸口へ行って、かいだんをあがって、へやへはいりました。そこではなにもかも、せんとかわっていませんでした。柱どけいが「カッチンカッチン」いって、針がまわっていました。けれど、その戸口をはいるとき、じぶんたちが、いつかもうおとなになっていることに気がつきました。

And then she rode away into the wide world. But Gerda and Kay went hand-in-hand towards home; and as they advanced, spring appeared more lovely with its green verdure and its beautiful flowers. Very soon they recognized the large town where they lived, and the tall steeples of the churches, in which the sweet bells were ringing a merry peal as they entered it, and found their way to their grandmother's door.

They went upstairs into the little room, where all looked just as it used to do. The old clock was going "tick, tick," and the hands pointed to the time of day, but as they passed through the door into the room they perceived that they were both grown up, and become a man and woman.

## The Snow Queen

おもての屋根やねのといの上では、ばらの花がさいて、ひらいた窓から、うちのなかをのぞきこんでいました。そしてそこには、こどものいすがおいてありました。カイとゲルダとは、めいめいのいすにこしをかけて、手をにぎりあいました。ふたりはもう、あの雪の女王のお城のさむい、がらんとした、そうごんなけしきを、ただぼんやりと、おもくるしい夢のようにおもっていました。

おばあさまは、神さまの、うららかなお日さまの光をあびながら、「なんじら、もし、おさなごのごとくならずば、天国にいることをえじ。」と、高らかに聖書せいしょの一せつをよんでいました。

The roses out on the roof were in full bloom, and peeped in at the window; and there stood the little chairs, on which they had sat when children; and Kay and Gerda seated themselves each on their own chair, and held each other by the hand, while the cold empty grandeur of the Snow Queen's palace vanished from their memories like a painful dream.

The grandmother sat in God's bright sunshine, and she read aloud from the Bible, "Except ye become as little children, ye shall in no wise enter into the kingdom of God."



## 雪の女王



カイとゲルダとは、おたがいに、目と目を見あわせました。そして、

And Kay and Gerda looked into each other's eyes, and all at once understood the words of the old song,

「ばらのはな さきてはちりぬ  
おさなごエス やがてあおが  
ん」

*"Roses bloom and cease to be,  
But we shall the Christ-child see."*

## The Snow Queen

というさんび歌のいみが、に  
わかにはっきりとわかってき  
ました。こうしてふたりは、  
からだこそ大きくなっても、  
やはりこどもで、心だけはこ  
どものままで、そこにこしを  
かけていました。ちょうど夏  
でした。あたたかい、みめぐ  
みあふれる夏でした。

And they both sat there, grown up, yet children at  
heart; and it was summer,—warm, beautiful  
summer.



Больш книг-білінгв на [bilinguator.com](https://bilinguator.com)  
More bilingual books on [bilinguator.com](https://bilinguator.com)  
Więcej dwujęzycznych książek na [bilinguator.com](https://bilinguator.com)  
Больше книг-билингв на [bilinguator.com](https://bilinguator.com)  
Більше книг-білінгв на [bilinguator.com](https://bilinguator.com)

2024